

# 東方被圧迫民族連合会（一九二五—一九二七）について

水野直樹

## はじめに

- 一 広州における被圧迫民族連合会
  - 1 成立
  - 2 構成メンバー
  - 3 活動
  - (1) 日常的活動
  - (2) アジア人圧迫への抗議
  - (3) 中国国民革命への支援・参加
  - (4) 世界の革命運動への支援・連帯
- 4 解体
  - 二 上海における被圧迫民族連合会結成の試み
  - 三 武漢における東方被圧迫民族連合会
  - 1 成立
  - 2 構成メンバー
  - 3 活動
- 注 おわりに——朝鮮人にとつての東方被圧迫民族連合会

## はじめに

中国の国民革命が、中国の歴史においてだけではなく、東アジアの歴史においても大きな意義を持っていることは、いうまでもない。東アジアの近代史、とりわけ中国とその近隣諸国との関係の中で中国国民革命をとらえることは、国民革命の歴史的評価に関わるものでもある。しかし、そのことを具体的な事実をもって明らかにした研究はほとんどないといわねばならない。

筆者は先に、「黄埔軍官学校と朝鮮の民族解放運動」(『朝鮮民族運動史研究』第六号、不二出版、一九八九年二月)を発表して、黄埔軍官学校(中央軍事政治学校)と朝鮮人の関わりという面からこの問題についての考察を試みたことがある。そこでは、黄埔軍官学校に数多くの朝鮮人青年が学び、軍事技術を習得するとともに国民革命の理念に共感を抱いたこと、そしてそのことがその後の朝鮮の民族解放運動にも大きな影響を与えたことなどを明らかにした。

しかし、中国国民革命と朝鮮の民族解放運動との関係、さらには国民革命期における東アジア諸民族の共同闘争についてはまだ多くの課題が残されている。その一つが、本稿で取り上げる東方被圧民族連合会である。

同連合会は、一九二五年から二七年にかけて、国民革命のさなかに広州と武漢で中国人、朝鮮人、インド人、ヴェトナム人などによって結成された国際的な組織であった。

当時広州に来ていた朝鮮人革命家キム・サンは、同連合会について次のように述べている。

広州では、中国革命との連帯を示すため各国から集まった人々に会った。彼らはとりわけ朝鮮人に対し、同じく義勇兵だというので友好的だった。「中略」われわれはこんなにも歴然と国際的連帯を感じとれることがうれしくて、みんなの写真をうつした。インドシナからはフランスで教育を受けた優秀な共産主義者が来ていた。一九二六年にわれわれは「東方被圧民族連合会」を設立し、朝鮮革命青年会、インドシナ民族党、台湾人、インド人の個人などを結集した。<sup>(1)</sup>

同連合会については、従来、断片的に言及したものがあただけで、専論あるいはまとまって記述したものはまったくない。

まず同連合会と朝鮮人との関わりについては、黎顕衡「大革命前後、広州における朝鮮青年の革命活動」(『広州文博』第一六・一七期、一九八六年)が、広州の連合会について簡単に触れているほか、一九五〇年代に韓国の愛国同志援護会が刊行した『韓国独立運動史』(ソウル、一九五六年)と、中国在住のもとアナキスト柳子明の回想『私の回憶』(朝鮮文、瀋陽 遼寧人民出版社、一九八四年)が武漢の連合会に言及しているだけである。

これに比べて、ヴェトナム人と同連合会との関わりについては、ホー・チ・ミンが連合会の幹部を務めていたため、ホー・

チ・ミンの伝記<sup>(2)</sup>やヴェトナム史の研究書<sup>(3)</sup>などにおいて触れられているが、それほど詳しいものではない。また連合会の構成に言及しているものも、互いに食い違いがあったり、誤りがあったりする<sup>(4)</sup>。これらヴェトナム史の研究で食い違いがみられるのは、当該時期の中国側の資料を使わず、主にヴェトナム人の回想によっているためであろう。

中国側の資料を利用した研究としては、黄錚『胡志明与中国』（北京 解放军出版社、一九八七年）がある。同書は、連合会の成立宣言などを引用しながら連合会におけるホー・チ・ミンの活動をかなり詳しく述べているが、ホーの活動に焦点が絞られているため、連合会の全体像が明らかにされているとはいえない。また同書では、連合会の結成と活動を中国共産党が指導したことが強調されているが、その根拠は示されていない<sup>(5)</sup>。

連合会には多くのインド人が関わっていたが、それについて論じた研究はさすがにできなかった。

以上のように、東方被圧迫民族連合会に関しては、いまだほとんど研究がなされていないといつてよい状態である。

本稿は、連合会と朝鮮人との関わりを検討しようとするものであるが、連合会の成立、構成、活動などの事実関係についてもできる限り詳細に明らかにしたいと思う。それを通じて、中国国民革命と朝鮮の民族解放運動との関係、さらには東アジアにおける中国国民革命の意義を考えてみることにする。

本稿で利用する資料は、『広州民国日報』『漢口民国日報』（いずれも中国国民党系新聞）および『工人之路』（中華全国总工会省港罷工委員会機関紙）など主に中国側の資料である。これらに加えて若干の朝鮮側・日本側の資料を使う<sup>(6)</sup>。

## 一 広州被圧迫民族連合会の成立

## 1 成 立

一九二五年の五三〇運動の高揚は、中国在住のアジア人にも大きな影響を与えた。中国における反帝国主義運動の展開は、帝国主義列強によって祖国を支配されているアジアの諸民族にとっても、民族解放運動を高揚させるための絶好の条件と考えられたのである。とりわけ反帝国主義運動の高まりを肌身で感じるようになった中国在住のアジア人の中から、五三〇運動、ひいては中国国民革命に参加しようとするものが出てくるのは、当然のことであつたといつてよい。

中国南方での省港ストに対して英仏両軍が広州で沙基惨案（一九二五年六月二三日）を引き起こし中国人労働者らを虐殺したことが、中国在住アジア人の団結を呼び起こすきっかけとなつた。

沙基惨案直後の六月二五日頃、四人のインド人が全国总工会省港罷工委員会招待部にやってきて英帝国主義の圧迫からの保護を求めるとともに、反帝国主義運動に加入するよう各地のインド人に呼びかける意志を示した。これに対して招待部は彼らに「保護証」と「被圧迫民族連合起来」の小旗を与えた。<sup>(1)</sup> 二七日朝までに招待部にやってきたインド人は二〇名余りにのぼつたといふ。<sup>(2)</sup> これらのインド人によってであるう、六月末には沙基事件に関する通告が発せられ、それにもとづいて同月三〇日に広州の惠州会館（中国国民党中央党部が置かれていた建物）でヴェトナム人、朝鮮人らによる「人民大会」が開かれることになつた。<sup>(3)</sup> 同大会の内容は不明だが、「住広州高麗、安南、印度代表」の名義で採択された宣言は、日本・イギリス・フランス帝国主義が中国人に加えている野蛮行為は我々が受けてきたものと同じであること、中国を「第二の印度、安南、高麗」にしてはならないこと、そのためには団結が必要なことを訴えるところに、「現在我々には帰るべき国がなく、中国が我々の革命根拠地であり、

力を尽くして諸君「中国人」の後盾になることを誓う。我々は中山先生「孫文」とその革命党が被圧迫民族に対して示した広大な政綱をよく知っており、今後諸君と我々がその革命的政綱に従って正しく行動し、連合して帝国主義を打倒することを願う」と呼びかけた。<sup>(4)</sup>

このような動きに対して、中国人の側は大きな期待をかけ、実際のな援助もしていたと見られる。「廣州民国日報」は、六月三〇日付に時評「全世界の弱小民族は連合して起ち上がろう」（筆者・謙聲）、七月三日付の自由評論欄に論説「東方被圧迫民族大連合の第二聲」（筆者・童炳榮）を掲げて、アジア諸民族の団結を呼びかけた。

七月九日、朝鮮、ヴェトナム、インド、中国の代表百名余りが越秀南路五三号の会場に集まって、被圧迫民族連合会の成立大会を開いた。四人の通訳を介して挨拶を行なったのは、国民党中央代表陳春圃（中央党部秘書）、中華全国总工会代表黄平の二人である。陳と黄の挨拶の後、会規・宣言についての討議が行なわれ、それらを修正通過し、「国民革命万歳、世界被圧迫民族連合万歳」を斉唱して、大会を終えた。<sup>(5)</sup>

会規は、以下のとおりである。<sup>(6)</sup>

- (一) 命名…本会の名称を被圧迫民族連合会とする。
- (二) 宗旨…各民族と連絡し共同して革命をなし、もって帝国主義を打倒することを宗旨とする。
- (三) 会員資格…(甲) 本会の宗旨に賛成し本会の条律を遵守する事を願ひ、二人の会員の紹介のある者は誰でも本会に入して会員となることを得る。(乙) 各同志団体はその団体の名義をもって加入することを得る。
- (四) 会員義務…(甲) 各人の職業の別に従つて中国の各種職業団体に加入する。(乙) 毎月会費一毫を納入しなければならない。(丙) 移住する時は本会に通知せねばならない。
- (五) 組織…(甲) 総部委員六人、書記兼財政一人。(乙) 支部は各国あるいは団体によって設け、成立したときは総部に通知する。

(六) 会律(すなわち会員資格の取消)。(甲) 三カ月会費を欠いた者(罷工中の者はこの限りにあらず)。(乙) 本会の名譽を妨害する行為のあつた者。(丙) 反革命行為を犯した者。(丙) 項の者は会員資格を取り消すのみならず、さらに相當の懲戒を加える。

(七) この会規は大会の通過を経て即日施行する。必要が生じた時、本会は大会を召集して再度検討する。

会規の特徴としてあげられることは、「連合会」という緩やかな組織であるにもかかわらず、入会に二人の会員の紹介が必要なこと、会員資格の取消についてもかなり厳しい規則を定めていることである。これはおそらく中国国民党(もちろん共産党も)が党員に課していた規律を取り入れていたのであろう。さらに、会員の義務の一つとして「中国の各種職業団体に加入する」としていることは、省港ストに参加したアジア人を中国側の団体が保護ないし救済するという意味合いもあつたといえ、アジア人各々の民族的な結集を妨げるおそれのあるものであつた。

その後、この会規には部分的な修正が加えられた。一九二五年九月一三日の第四回会議で定められた「簡章」は、従来の会規とほとんど同じ項目からなっているが、会員の義務に関して、「本会会員は各人の職業にしたがい本会指定により所在地方の職業団体に加入する」と改められた。「中国の職業団体」の字句が修正されたのである。また、委員の選出についても中国以外の民族の委員が一定数を確保するように配慮が加えられた。「総部委員六人」となっていたのを総務部長一名の下に、委員を中国、インド、朝鮮、ヴェトナム各国から二名、各団体から一名ずつ選出すると改めた。中国人委員の数を限定したものとされる。さらに、国別に一つないしそれ以上の支部を組織することも定められている。<sup>(7)</sup> 民族的結集を保障すること、そして連合会に加入している各民族にできる限り平等な地位を保障することが、会規から簡章への改正の眼目となつたといえる。一ヶ月余りの活動の中で、中国人以外のメンバーから会規の問題について意見が出されたためであらう。<sup>(8)</sup>

大会で採択された宣言は、七月二〇日の『広州民国日報』『工人之路』に発表された。<sup>(9)</sup>

「全世界の圧迫されている兄弟たちよ! われわれ被圧迫民族はいますでに根本的に覚悟している」で始まる宣言は、帝国主

義が東方の弱小民族を支配しており、「我々が庄迫からのがれる唯一の路は、ただ全世界の被庄迫弱小民族と無産階級と連合して、革命の手段をとって、万悪許すべからざる資本帝国主義を根本から覆すことよつてのみ可能である」「民族革命と無産階級革命は形式の上では同じではないが、国際資本主義を覆す世界革命の両側面である」として、民族革命と無産階級革命の連携を強く主張する。「われわれの『被庄迫民族連合会』は一九二五年七月九日中国の廣州で丁重に成立を宣言した。この会に参加しているのは、中国、インド、高麗、安南の各国同志であり、これはわれわれ東方被庄迫者が根本的に覚悟したことを最大限に示した出発点である」と連合会の成立を意義づけた後、「被庄迫民族」に向けて次のように呼びかける。帝国主義がわれわれを牛馬のように搾取するのは、われわれが団結していないからであり、団結してともに起ち上がれば、牛馬のようにこき使われていたわれわれも「勇猛な獅子」になることができる、「兄弟たちよ、速やかにわれわれの力量を合わせて起ち上がり、公理・自由と同胞のために戦おう!」。次いで宣言は「被庄迫の無産階級」に対して次のように呼びかけている。「あなた方を搾取しているものとわれわれを搾取しているものが同じであることを、あなた方は知らなければならぬ」「あなた方が自らの解放を謀るには、われわれと連合しなければならぬ。われわれが帝国主義者のくびきから逃れるには、必ずあなた方の援助が必要である」「あなた方がわれわれの連合会に加入して帝国主義と最後までたたかうことを切に望んでいる」。

宣言は全体として、民族革命と無産階級革命の連携を強調するもので、民族革命そのものの独自の意義を主張するものではなかった。その意味では、連合会はコミンテルンの民族・植民地問題に対する方針に沿うものとして出発したといえる<sup>(10)</sup>ことができる。

連合会自らも、宣言の発表とほぼ同時に、コミンテルンあてに電報を送って、コミンテルンに対する支持を表明している。電文は、国際連盟が帝国主義の大本営であるのに対して、コミンテルンは「無産階級および被庄迫民族の大本営」であり、「われわれの友人」であるとして、「われわれ被庄迫民族は独立運動および反帝国主義運動の中にあつて、われわれの友人第三国際<sup>(11)</sup>の各国の支部と合作し、われわれの最後の成功に到達することを望む」と述べていた。

しかし、連合会がコミンテルンの指示を受けて結成されたと見ることもできない。コミンテルンの機関誌が連合会に関する文章を載せたのは、成立から五ヵ月後のことである。コミンテルンの情報誌『インプレコール』は、一九二五年一二月、香港からの通信として「東方における被圧迫人民の国際同盟」を掲載して、連合会成立のニュースを伝えた。この通信は、連合会の成立宣言、参加団体を紹介した後、連合会のこれまでの活動は中国とその近隣諸国に限られていたが、将来は日本、インド、アメリカ、フランス、アフリカなどの諸組織とも連絡をとって「反帝国主義統一戦線」を成立させる計画である、と述べている。<sup>(12)</sup>これは連合会の成立を伝えるだけのごく簡単な文章でしかなかった。しかも、コミンテルンの機関誌で連合会について書かれた文章としては、これが唯一のものであった。広州駐在のボロディンその他が連合会の幹部からその活動について報告を受けていたことは充分考えられるが、<sup>(13)</sup>細かな点にまで指示を与えていたとは思えない。ましてコミンテルン本部が連合会に関する情報を把握して、指示を伝えたと考えすることはできない。

## 2 構成メンバー

被圧迫民族連合会は会規によれば、個人加入と団体加入を認めていた。では、いかなる団体、個人が会員になっていたのだろうか。

一九二五年九月、連合会の朝鮮人幹部姜世宇は、省港罷工工人第二五回代表大会で連合会を代表して演説したが、その中で連合会加入団体は、「中国国民党、印度革命団、朝鮮革命団、安南革命団、中国全国总工会、広東全省農民總會、党軍軍官学校、青年軍人連合会、婦女解放連合会、広東電話女司機連合会」であることを明らかにしている。<sup>(14)</sup>つまり、中国人の団体七、アジア人の団体三である。

中国国民党をはじめ中国の団体のメンバーには、共産黨員も多かったことはいうまでもない。党軍軍官学校は黄埔軍官学校のことであり、青年軍人連合会は同軍官学校の教官・学生で組織されていた共産党系の団体である。二つの女性団体が加入してい



ることも注目されるが、国共合作を支える大衆組織である労働団体、農民団体、そして軍人の団体が揃って加入していることは、連合会が中国側の全面的な支援を得ていたことを物語るものである。

インド、朝鮮、ヴェトナムについては、それぞれ「革命団」なるものは存在しなかった。さまざまな傾向を持つ広州在住の人物を「革命団」という名称にまとめたものであろう。中国とは異なりこれら三国は帝国主義に支配される植民地であったので、弾圧を避けるためにも団体名を明示しなかったものと思われる。

その後、一月八日の会議にビルマ代表<sup>(15)</sup>、翌二六年二月二日の大会にシヤム代表が出席している<sup>(16)</sup>ので、広州の被圧迫民族連合会は中国、朝鮮、インド、ヴェトナム、ビルマ、シヤムの六民族の代表が加わる連合会になった。二七年二月までには、朝鮮と同じく日本の植民地である台湾の代表も参加していることが確認できる（後述）。連合会は文字どおり中国在住アジア人の国際共同組織として発展したのである。

連合会の幹部として活動した人物は、次ページの表のとおりである。

朝鮮人のうち、姜世宇は金元鳳が率いる義烈団のメンバーで、義烈団員の多くが黄埔軍官学校に入った時、姜は中山大学政治学科に入学した<sup>(17)</sup>。孫斗煥は義烈団員ではなかったが、金元鳳と親しく、黄埔軍官学校の教官を務めたこともあり、朝鮮人の黄埔軍官学校入校に力を尽くした人物である<sup>(18)</sup>。日本側資料では「広東在住不逞鮮人首領<sup>(19)</sup>」とされている。

ヴェトナム人では、李瑞はホー・チ・ミンの別名であり、丁済民は黄埔軍官学校の教官を務めていた<sup>(20)</sup>。

中国人幹部のほとんどは、共産党員であった。中国共産党が組織的に連合会を支援することを決めていたかどうかは不明だが、共産党員が連合会で指導的な立場に立っていたことは推測できよう。しかし、それはあくまで国共合作の枠内でのものだった。連合会の活動においては共産党が表面に出ることはなく、国民党や国民党系の団体のメンバーとして連合会に参加していたのである。

では、連合会に対する国民党の姿勢はどのようなものであったのだろうか。

表 広州被圧迫民族連合会の構成員

民 族	姓 名	連合会での活動・地位など	備 考
朝 鮮	姜 世 宇	25. 7 執行委員 25. 9 罷工工人大会で演説	義烈団員
		26. 2 執行委員 (組織) 26. 4 主席	
イ ン ド	王 山 而	25. 7 執行委員	黄埔軍校教官
	孫 斗 渙	25.11 華僑歓迎大会で演説	
ヴェトナム	巴特因頼	25. 7 執行委員	黄埔軍校教官 ホー・チ・ミン
	忌厘沙士	25.11 華僑歓迎大会で演説 (広東語で)	
中 国	林 嘯 松	25. 7 執行委員・主席 26. 2 執行委員(庶務)	黄埔軍校教官 ホー・チ・ミン
	丁 濟 民	25.11 華僑歓迎大会で演説	
	李 瑞	25. 7 執行委員 26. 2 執行委員 (財政)	中共黨員
		26. 5 宣言翻訳 26. 8 宣言など翻訳	
	譚 平 山	25. 7 執行委員 (国民党)	中共黨員 黄埔軍校教官
	段 子 文	25. 7 執行委員 (軍人連合会)	
	鄧 中 夏	25. 7 執行委員 (全国総工会)	中共黨員
	阮 嘯 仙	25. 7 執行委員 (農民協会)	
	鮑 惠 僧	25. 7 執行委員 25.11 華僑歓迎大会で演説	中共黨員
		26. 2 主席・執行委員 (交際)	
中国 (?)	汪 精 衛	25. 9 総務部長に推挙 (未就任?)	国民党幹部 中共黨員
	許 魁 魂	26. 2 執行委員 (文牘) 26. 3 主席	
		26. 5 会務報告 26. 8 執行委員会常務委員	中共黨員
	王 一 飛	26. 3 活動報告	
	石 盛 祖	26. 2 執行委員 (調査)	国民党員
	羅 享	26. 2 執行委員 (宣伝)	
	蕭 一 平	26. 5 執行委員・宣言起草	国民党員
	馬 瑞	26. 5 組織工作報告	
	曾 覚 君	26. 5 執行委員 26. 8 宣言など起草	国民党員
		26. 5 英国罷工援助委員会に参加	
不 明	譚 毅 起	26. 2 シャムなどの情勢報告	

中国国民革命の研究

(備考) (1) 『広州民国日報』『工人之路』の記事より作成

(2) 備考欄の「中共黨員」は、李盛平主編『中国近現代人名大辞典』(北京 国際広播出版社、1989年)により確認。

三一八

国民党は代表を正式メンバーとして連合会に送ってはいしたが、主要な黨員・幹部は連合会に関わっていないといふべきであろう。一九二五年九月一日の連合会の会議で、汪精衛を総務部長に推すことが決められたが、汪が実際にその職務に就いたかどうかは確認できない。しかし、国民党の機関紙である『広州民国日報』が連合会の活動を詳細に報じていることから考えて、国民党が連合会を積極的に支援していたと見て間違いない。連合会の側では、一九二六年八月上旬の執行委員会では、『広州民国日報』に対して、同紙の思潮欄に週一回「被圧迫民族運動週刊」を設けて会員の投稿を載せるよう求めることを決めている。<sup>(22)</sup>

また、連合会は一九二六年二月二日、国民党中央党部で大会を開いたが、

そこでは財政を確立するために会費納入を厳格にすることと並んで、「必要な時には国民党の援助を要請すること」が決められた。<sup>(23)</sup> 国民党が実際にどの程度の財政支援を行なったかはわからないが、連合会が国民党の援助を前提として活動していたことは明かであろう。

幹部の多くが中国人であり、対外的な活動の多くが中国人によって担われていたことも否定できない。しかし、連合会が中国人によって運営され方針が決定される団体だったとも簡単に断定できない。それは、連合会の実際の活動を見ても中国以外の問題に相当の重点を置いていたことからわかる。また別表に見られるように、一九二六年二月以降の執行委員は中国人とそれ以外の民族がほぼ同数であり、会議の主席(司会)も回り持ちで決められていたと考えられることにも、それは表われている。

なお、連合会の会員数ははつきりしないが、一九二六年二月の大会で、「今後一ヵ月間で五百人以上の会員を増やすこと」「一人の会員はこの一ヵ月の間に少なくとも五人の新会員を紹介すること」が決められていること<sup>(24)</sup>から考えて、成立から半年後の一九二六年の初めの段階で一〇〇人前後だったと見られる。その後、同年三月一五日の執行委員会で一〇〇人の新入会員があったことが報告されている。<sup>(25)</sup> 多い時で一〇〇人前後と考えるのが妥当であろう。

### 3 活 動

一九二五年七月から一九二七年四月まで二年近くにわたる被圧迫民族連合会の活動は、大きくいうと反帝国主義運動として展開されたものだが、それらはいくつかの種類に分けて考えることができる。(1) 日常的活動、(2) 中国在住のアジア人に対する圧迫への抗議、(3) 中国国民革命への支援・参加、(4) 世界(とりわけ植民地)の革命運動への支援・連帯、である。

これらはもちろん相互に深く関連するものであった。連合会は、中国国民革命をさまざまな形で支援し、また実際に国民革命の運動に参加した。中国人の側の意図は、国民革命への国際的支援を獲得するにとどまらず、帝国主義の「手先」の役割を果たしている中国在住のインド人やヴェトナム人を反帝国主義の側に引きつけることにあった。そのために連合会は、中国在住のア

ジア人に対して帝国主義当局が加えている圧迫を暴露し、中国国民革命への共感を獲得することを活動の一つの柱としたのである。一方、連合会に結集したアジア人は中国国民革命に参加しつつ、被支配民族の解放運動への支援を中国人の間に広めていくことをめざした。

### (1) 日常的活動

連合会の日常的な活動としては、執行委員会の開催、会員の登記などがあつた。執行委員会については、成立大会から同年一月一日までに六回の会議が開かれていることが確認できる。翌二六年二月二二日の第二次大会以降は、一九二六年八月七日に第七次会議が開かれている。つまり、ほぼ月一回のペースで会議が持たれていたことになる。しかし、その後の執行委員会については記事が見えない。北伐の開始で執行委員の中には広州を離れるものも多く、執行委員会の開催が難しくなつたと思われる。それは執行委員のみならず一般の会員についても同様であつた。一九二六年八月から十一月にかけて会員登記の整理を行なうことが呼びかけられているのは、それを反映したものであろう。

執行委員会では、会員の獲得、財政の確立、機関誌の発刊、事務所設置などの問題が協議された。機関誌に関しては、一九二五年八月の会議で「姜同志」(姜世宇であろう)が不定期刊行物の出版を提議し、姜と「黄同志」をその編集責任とすることが決められた。<sup>(27)</sup>しかし、その後、連合会の機関誌が刊行されたかどうか確認できない。前に述べたように、『廣州民国日報』に「被圧迫民族運動週刊」の掲載を求めていることから考えて、機関誌は結局出なかつたのであろう。事務所問題も連合会にとつて重要なものだつたようである。当初、暫定的に越秀路の惠州會館に事務所を置いていたようだが、執行委員会の会議は国民党中央党部や印緬同志倶楽部<sup>(28)</sup>などを借りて開かれており、事務所設置は連合会の重要課題となつていたようである。一九二六年八月に会員登録を呼びかけた時には、「大東路東皋大道仁興街一号」が事務所の住所になつて<sup>(29)</sup>いるが、これも暫定的なものに過ぎなかつたようである。

執行委員会は、連合会の活動について協議を行なうばかりでなく、アジア各民族の状況について報告し情報を交換する場でもあった。例えば、一九二六年五月の会議では、姜世宇がシリア、モロッコ、朝鮮などの独立運動の現状を、林嘯松がヴェトナムの状況を報告している。<sup>(30)</sup> 議題として取り上げられなくても、お互いに自らの祖国の状況などを話し合うことは、きわめて自然なことであった。多くの民族が席を同じくするだけに言葉の問題は大きな障害になったかもしれない。しかしそれ以上に、アジア各民族がお互いの置かれている状況、直面している問題について情報と意見を交換することのできる場をもち得たことは、大きな意味をもつものだったといえよう。

## (2) アジア人圧迫への抗議

一九二五年七月、ヴェトナム民族運動の指導者ファン・ボイ・チャウ（潘巢南、潘是漢）が逮捕され、フランス当局に引き渡された上、ヴェトナムに送還された事件について、連合会はフランス領事あてに抗議の電報を送るとともに、通電を發してフランスが中国軍閥と結んで中国領内で無法な行動をしていることを非難した。<sup>(31)</sup> さらに、八月にはこの事件に関してヴェトナム国民に送る書を發表して、長くヴェトナム解放のためにたたかってきたファン・ボイ・チャウを讃えつつ、「フランス帝国主義は潘君一人を捕らえることができたとしても潘君の民族革命主義をとじこめることはできない」として、ヴェトナム人に民族革命の實行を呼びかけた。<sup>(32)</sup>

一九二六年三月には、広州のドイツ領事館に門番として勤務していたインド人が解雇された問題に関して、連合会はドイツ領事に抗議の手紙を送った。新聞記事によれば、インド人「室門星」は沙基惨案発生以来、被圧迫民族の痛苦を自覚し、中国人の反帝運動に同情して各種の運動に参加してきたが、イギリス領事の要請を受けたドイツ領事によって解雇されたのだという。ストライキ糾察委員会はこの件を罷工委員会に報告したところ、罷工委員会から被圧迫民族連合会に通知がなされて、連合会がこの問題に取り組むことになった。連合会がドイツ領事に送った抗議文は、「本会の宗旨は世界被圧迫民族と連合して強權に反抗

し、弱者を援助することであり、問題のインド人室門星がもし中国反帝運動に参加したことで解雇されたのであれば、本会は座視して救援しないわけにはいかない」と述べている。<sup>(33)</sup>三月一五日に開かれた執行委員会でも、この問題に関して再度嚴重な交渉を行ない、それでも領事側が答えなければ「最後の手段」をとることを決議している。<sup>(34)</sup>三月一八日になってドイツ領事から連合会あてに、インド人の解雇は領事館の移転によるものであって、イギリス領事の要請にもとづくものではない、との返答が届いたが、連合会はさらに調査をして解決をめざす構えを見せた。<sup>(35)</sup>その後、この問題については報じられていないので、どのような結果になったかは明かでない。

これらとは若干異なるが、中国在住アジア人に対する差別の問題にも連合会は関心を払っていた。一九二六年五月一四日の執行委員の会議で、李瑞（ホー・チ・ミン）は、インドの同志が広東人から「黒鬼」と呼ばれたことを報告し、これについての対策を求めた。<sup>(36)</sup>この問題に連合会がどのような取り組みを行なったのかはわからない。しかし、連合会が中国人の「中華意識」にも反対して、中国在住アジア人の基本的人権を擁護する立場に立っていたことは確認できよう。

### (3) 中国国民革命への支援・参加

連合会が行なった活動として最も多いのが、中国国民革命への支援、あるいはそれへの直接的な参加である。それらは声明の発表や集会への参加などの形でなされることがほとんどだった。時間を追ってそれらの活動を見ておこう。

連合会成立直後の一九二五年八月二〇日、中国国民党左派の中心人物廖仲愷が暗殺された。連合会は国民党の中央葬儀に参加するとともに追悼宣言を発表した。宣言は廖仲愷を「中国国民革命の導師」と呼んで哀悼の意を表するとともに、「革命戦線の統一」を主張した。<sup>(37)</sup>

九月一九日に開かれた省港ストの第二五次労働者代表大会には、連合会を代表して姜世宇が出席し、演説を行なった。姜は、連合会の目的や加入団体などについて説明し、連合会への支援を呼びかけるとともに、省港ストが帝国主義に大きな打撃を与え

ていることを述べて、ストライキ中の労働者を激励した。<sup>(38)</sup>

一〇月一日から国民革命軍は広東省東部に根拠を構えていた陳炯明軍を「討伐」して革命の根拠地を固めようと第二次東征を開始した。連合会はこの東征を支援する活動を行なうことを決め、一〇月一日の第六次会議で、宣伝隊を組織して東征に参加させること、「譚同志」に委任してピラを作成し、宣伝隊に配布させて「本会の宗旨を人民に知らしめること」を決定した。<sup>(39)</sup>「譚同志」とは譚平山のことであろう。連合会はさらに、東征を支持する宣言を発表して、東征は「イギリス帝国主義およびその走狗との戦争であり、「本会は」全力を尽くしてその後盾となり、全世界の弱小民族に呼びかけて共同して声援を送らねばならない」と訴えた。<sup>(40)</sup>

一月二二日には、国民革命を支持する世界各地の華僑代表が広東にやってきた時、連合会は彼らを歓迎する大会を広東省農民協会で開いた。鮑惠僧を主席（司会）として行なわれた歓迎大会では連合会のインド人忌厘沙士、安南人丁済民とともに「華僑代表孫斗煥」が演説したとされる。<sup>(41)</sup>孫斗煥はすでに述べたように広州在住朝鮮人の中の有力者である。

一九二六年一月、中国国民党第二次全国代表大会が開催された。五三〇運動の高揚の中で開かれたこの大会は、とりわけ反帝国主義の色彩を強く打ち出すものとなった。帝国主義に対する批判を主軸とする大会宣言や、ソヴェト・ロシアとの連合、弱小民族への支援、世界の革命民衆との連携を柱とする「対外政策進行案」が採択されたほか、大会初日の一月四日には「全世界被圧迫民族と各先進国被圧迫階級に送る電文」が決議された。電文は「ある国の国民革命は、先進国の労働者階級の党と革命的民衆およびその他弱小民族の同情と援助がなければ、成功するものではない。世界革命も、東方各植民地の国民革命の前進がなければ、成功するものではない」としていた。<sup>(42)</sup>この大会で注目されるのは、ヴェトナム、朝鮮、インドの代表が参加して演説をしていることである。一月一四日の第一七回会議で演説したのは、安南代表王達人、高麗代表呂光克、印度代表哥巴清の三名である。<sup>(43)</sup>王達人はホー・チ・ミン、呂光克は呂運亨である。<sup>(44)</sup>インド代表の哥巴清が誰であるかは不明だが、ホーが広州の被圧迫民族連合会幹部であり、呂が上海で被圧迫民族連合会を結成しようとしていたこと（後述）を考えるなら、中国国民党二全大会は

「弱小民族」を代表するものとしての被圧民族連合会をきわめて重視していたことがうかがえる。連合会の側も二全大会に「弱小民族」への支援表明を期待していたといえる。

同年三月五日に開かれた中国済難会広東總會成立大会にも「韓人王達人」が参加して演説している<sup>(45)</sup>。王達人はホー・チ・ミンのことだが、「韓人」と記されていることは朝鮮人もこの大会に参加していたことを推測させる。済難会と朝鮮の独立運動の関わりについては後述する。

三月中旬には、連合会は宣言「パリ・コミューン記念日に中華民族に告げる」を発表するとともに、一八日に開かれた広東各界紀念巴黎公社大会にも参加して、代表が演説した<sup>(46)</sup>。

四月一五日には、イギリス、フランス、オランダなどがそれぞれの植民地に在住する華僑を圧迫していることに抗議して宣言を発表している<sup>(47)</sup>。

五月一日、広州のメーデー大会は国民政府、全国総工会、省農民協会などの主催で開かれ、八〇〇団体、三〇万名余りが参加したといわれるが、連合会もこれに参加して、代表李（李瑞珪・ホー・チ・ミンであろう）が演説した<sup>(48)</sup>。

五三〇の一周年を迎えて、五月下旬、三六の団体によって広東各界紀念五卅惨案週年籌備会が組織された時、連合会もこれに参加して、代表が演説股（演説担当）に選出された。示威巡行の呼びかけ文にも連合会は中国の各組織とともに名を連ねた<sup>(49)</sup>。

北伐が始まった後、七月に「省港罷工解決についての宣言」、八月に廖仲愷・陳秋霜両先生殉難一周年記念の宣言、一月には孫文誕生日記念の宣言などを発表して、抑圧されているアジア人の立場から中国国民革命の成功に対する期待を表明した<sup>(50)</sup>。

九月五日四川省万県で起きたイギリス軍艦による住民虐殺事件に対して、広州では広東各界反抗英帝国主義屠殺万県同胞及援助韓国独立運動大会が一〇月二六日に開かれた。連合会もこれに参加したが、朝鮮独立運動の援助をも目的に掲げる集会になったことについては、後述する。

一九二七年に入ると、二月に国際労働者代表团（トム・マン、アール・ブラウダーら）一行が広州を訪問した。国民党省党部、



全国総工会などの主催で二三日に開かれた代表团歓迎大会には、約千の団体、二〇万名が参加したといわれるが、連合会も大会に参加し、連合会が代表团に贈った赤旗は正面の演壇に飾られたという。大会には、「留粵韓国革命青年会代表盛聲」も参加していた。<sup>(51)</sup>これは呉成崙の仮名「咸聲」の誤りであろう。黄埔軍官学校の教官を務めていた呉も連合会のメンバーだった可能性が高い。<sup>(52)</sup>国際労働者代表团は省港スト労働者と朝鮮人活動家に会い、記念の旗を贈った。朝鮮人に送られた旗には、「朝鮮とすべての被圧迫民族の解放は、被圧迫民族および全世界の労働者階級が武装し連合してこそ成功する」と記されていた。<sup>(53)</sup>

二五日には国際労働者代表团を迎えて、国際反帝武力干涉中国運動大会が開かれ、三〇万人が参加した。連合会からも朝鮮、台湾、ビルマ、ヴェトナム、シヤム、インドの代表が参加したが、インド人と朝鮮人が多かったという。開会后、トム・マン、ブラウダー、国民党省党部代表に続いて朝鮮、台湾、インドの代表が演説した。<sup>(54)</sup>台湾人の連合会加入を確認することができるのは、この大会の様相を報じた新聞記事だけである。しかし、キム・サンも、台湾人が連合会に参加していたと証言している。<sup>(55)</sup>短い期間ではあるが、台湾人も連合会に加わって活動していたと見られる。

北伐軍の上海・南京占領、これを妨害しようとする列強による南京事件が起こると、広州では、四月九日、広東各界慶祝克復滬寧及反抗帝国主義武装屠殺並援助死難同胞大会の準備会議が開かれ、大会開催の準備が進められた。連合会代表も三〇余りの団体代表とともにこれに加わり、編輯担当の委員に選出された。<sup>(56)</sup>しかし、この大会は、蒋介石による四・一二クーデタ、広州における四・一五クーデタのために開くことができなかった。

以上のように、連合会メンバーは中国国民革命推進のための集会などに参加した。連合会そのものの会員数は少ないので、このような活動を過大に評価することはできない。しかし、連合会のメンバーが集会に出席して演説をすることは、国民革命が国際的な支援を受けていること、国民革命がアジアの民族解放を励ますものであることを示す象徴と見なされていたのである。

## (4) 世界の革命運動への支援・連帯

世界各地の革命運動、民族解放運動に対する支援・連帯の活動は、一九二六年に入ってから活発になる。その際、アジアをはじめとする世界各地の問題に関心を払う連合会が、中国の各団体に呼びかけて共同で取り組むという形態がとられることが多かった。

一九二六年五月一日に始まったイギリス炭坑労働者のストライキが、全国のゼネストに発展したというニュースを受けて、連合会は五月一日、広州の各団体に書簡を送って、イギリス労働者のゼネスト支援のために会議を開くことを呼びかけた。<sup>(57)</sup> 連合会は、さらに「英国大罷工について省港罷工工友に告げる書」「英国大罷工について英領植民地民衆に告げる書」を相次いで発表して支援を訴えた。<sup>(58)</sup> ゼネストそのものは同月一二日に終了していたが、情報が届くのが遅かったため、実際の支援行動は五月下旬から六月初旬にかけて行なわれることになった。五月二四日、被圧迫民族連合会の呼びかけた会議が国民党中央党部海外部で開かれ、二三の団体が広東各界援助英国大罷工委員会が構成された。連合会からは曾覚君が代表として参加し、委員会の総務部副主任に選出され（主任は中央党部）、決議文起草を担当することになった。<sup>(59)</sup> 六月四日の同委員会第三次会議では、連合会は国民党中央党部、全国总工会、省農民協会、教育会、中央軍事政治学校、婦女解放協会、省商民協会などと並んで主席団メンバーに選ばれている。<sup>(60)</sup> 広東各界援助英国罷工大会は六月七日に開催され、広州市内のデモも行なわれた。参加者は三万名余りだったという。大会のスローガンには「英国労働者は中国民衆の同盟者である」「英国労働者の勝利は中国民衆の勝利である」などとともに、「東方被圧迫民族と西方被圧迫階級は連合して起ち上がれ」が掲げられていた。<sup>(61)</sup> 省港ストライキが継続されている中でイギリス労働者のストライキへの連帯を示すことは、国民革命の当面の闘争対象であるイギリスとの闘いにおいて重要なことであったが、それと並んで連合会が掲げていた「東方被圧迫民族と西方被圧迫階級との連合」が集会の主要な目的となったのである。

イギリス労働者ゼネストの支援活動の後、連合会が取り組んだのは植民地における独立運動への支援である。

すでに五月一四日の執行委員会第五次会議で、シリア、モロッコ（リーフ地方）、朝鮮、ヴェトナムにおける独立運動の状況が報告され、それらを援助する決議が採択され、それぞれの地に電報が打たれていた。<sup>(62)</sup>

朝鮮で六一〇独立運動（李朝最後の国王純宗の葬儀に際して朝鮮共産党などが独立示威を計画したもの）が起こった後、中国各地で朝鮮独立運動への支援の声が高まった。

七月初旬、中華全国总工会、省港罷工委員会が相次いで朝鮮の革命運動支援に関して通電を發したのをはじめ、八月には北京の总工会も朝鮮独立運動援助を呼びかける通電を出している。<sup>(63)</sup> 全国总工会の通電は、「韓国民族と同じく圧迫を受けているわれわれ中国民衆は、日本帝国が韓国の革命同胞を惨殺している時、座視することはできない。全国さらには全世界の被圧迫民族および被圧階級に呼びかけて、一致して韓国革命運動に精神的・物質的援助を与えなければならない。韓国人民が日本帝国主義者に対して絶えることなく反抗を継続して最後の成功を勝ち取り、日本帝国主義者を打倒することができるようにするならば、ただ韓国人民が真の解放を得るだけではなく、中国革命の成功、中国民族の解放もまた勝ち取ることができるであろう」と述べて、朝鮮の革命運動への積極的な支援を呼びかけている。

この間、広州の被圧迫民族連合会がどのような活動をしたのか明かでない。北伐の開始という情勢の中で表だった動きがとれなかったのかもしれない。

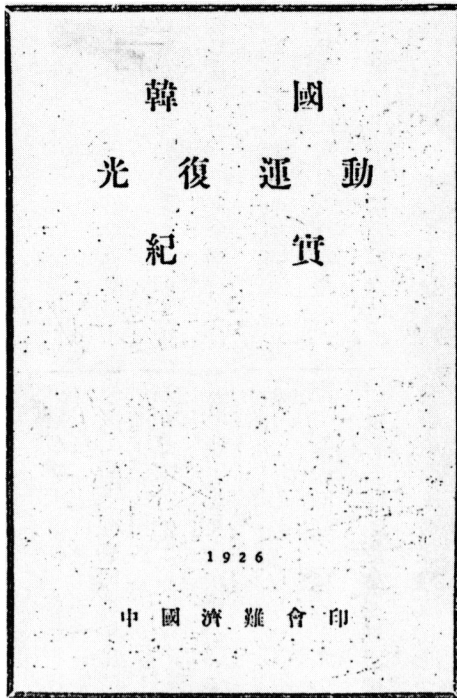
一〇月六日、済難会広東省総会の第二期幹事会議が開かれ、韓国革命運動と万県屠殺事件に関して被圧迫民族連合会と協議して各界民衆示威運動、募金救済の活動を展開することが決められた。済難会の幹事には、鮑惠僧、曾覺君、羅亭、許甦魂ら被圧迫民族連合会の中国人幹部が少なくなかった。<sup>(64)</sup> 前述のように、済難会の結成大会には連合会の王達人（ホー・チ・ミン）が主席して演説していた。済難会と連合会はきわめて近い関係にあったとみなしてよい。

広東の済難会の上部組織である中国済難会は、一九二六年八月に『韓国光復運動紀実』と題する中国語の小冊子を刊行している。この小冊子は、韓国独立運動犠牲者援助を訴えた中国済難会全国総会の宣言（八月二六日付）、上海にある朝鮮革命後援会

から済難会に寄せられた書信、および三一運動から六一〇運動までの概略を綴った論文「朝鮮革命史略」を収めて、中国人に朝鮮の独立運動への支援を呼びかけるものであった。小冊子は上海で刊行されたものと思われるが、国民政府の支援の下で済難会が合法的に活動していた広州でもこれが読まれたであろうことはいうまでもない。<sup>(65)</sup>

このように中国済難会はこの時期、朝鮮の民族解放運動に深い関心を払っていたのである。

一〇月中旬、広州の農工商学連合委員会、広東済難総会、統一広東各界代表会そして被圧迫民族連合会の四団体は共同で、万県事件と朝鮮独立運動に関して協議するための会議開催を各団体に呼びかけた。<sup>(66)</sup>一九日に開かれた会議には各団体から五〇名余りが参加し、広東各界反抗英帝国主義屠殺万県民衆及援助韓国独立大会を開くことが決められた。<sup>(67)</sup>それを受けて、広州工人代表大会が各工会に大会への参加を呼びかける通告を発したり、公安局政治部が反英・援韓の訴えを発表したりした<sup>(68)</sup>ほか、『広州民  
国日報』一〇月二六日、二七日の紙面に大会の「宣伝大綱」が掲載されるなど、北伐開始以後の広州における最大の大衆集会と



『韓国光復運動紀實』中扉

して取り組まれた。宣伝大綱は、イギリス帝国主義の「砲艦屠殺政策」を非難するだけでなく、日本の「人骨を喰らう帝国主義」をも厳しく批判している。朝鮮に対する日本の圧迫は対岸の火事ではない、「日本は単に朝鮮を圧迫しているだけなく、我国をも圧迫している。我国が日本に反対することは、ただ単に朝鮮を援助するだけでなく、自らを援助することでもある。全中国の民衆は連合して起ち上げられ、全世界の弱小民族と被圧迫階級は連合して起ち上げられ」と呼びかけられたのである。<sup>(69)</sup>

一〇月二六日中山大学で行なわれた集会には、一〇万名以上の参加者があったという。新聞報道では、集会名称は「広東各

界反抗英帝国主義屠殺万県同胞示威大会」となっており、「援助韓国独立運動」が落ちてしまっている<sup>(70)</sup>。実際の集会名称が変更になったとは思えないが、朝鮮独立運動援助の色合いは薄められ、イギリスへの抗議が集会の基調になったようである。とはいえ、集会開催までの宣伝などにおいて朝鮮問題が積極的に取り上げられたことは重要である。それは、被圧迫民族連合会の活動によるところが大きかったといえよう。

#### 4 解 体

一九二五年七月の成立以来、広州を拠点に活動してきた被圧迫民族連合会は、一九二七年四月一日広州での反共クーデタによって活動を停止せざるを得なくなった。中国人幹部の多くが共産党員だったことがその一つの原因であるが、中国人以外でも左翼的な人物と見なされる人物は、広州にとどまることはできなかった。ホー・チ・ミンはクーデタ後、武漢、上海を経てモスクワに行った<sup>(71)</sup>。

五月末、日本政府が山東への出兵を表明した時、広州でもこれに抗議する運動が展開された。しかし、六月一三日に成立した広東各界反抗日本出兵華北委員会の参加団体には、連合会の名はみられない<sup>(72)</sup>。クーデタ以前であれば、連合会が参加するのが当然と見られるこの種の運動に連合会が代表を出していないことは、連合会が活動を停止し、解体状態に陥ったことを示すものであった。

#### 二 上海における被圧迫民族連合会結成の試み

広州に被圧迫民族連合会が成立したのと同じ時期に、上海でも同様の団体をつくろうとする動きがあった。その中心になったのは朝鮮人活動家呂運亨である。

上海には、一九二一年に結成された中韓互助社があり、中国人側は呉山、朝鮮人側は呂運亨が中心となって宣言書の作成・配布などの活動を行っていたが、一九二五年までには活動は停滞してしまつたといふ。<sup>(1)</sup> 呂らは、国民革命の高まりの中で、中韓互助社を他の民族にまで拡大して広州と同じような被圧迫民族の共同組織を作ろうとしたのである。呂は、後に日本当局の取調べにおいて、「大正一四年七月中被圧迫民族連合会ヲ開催シタルコトアリヤ」という問いに、次のように答えている。

中韓互助社ヲ拡大シテ他ノ被圧迫民族ヲ糾合シテ連合会ヲ組織スルノ計画ヲ私及中国人呉山下協議シタコトガアリマスガ印度、安南ノ代表ヲ召集スルコトガ出来ナイノデ協議丈デ実現ハシマセンデシタ。<sup>(2)</sup>

当時被圧迫民族連合会ノ發起ハアリマシタガ印度、安南ノ代表者ガ無ク四民族ノ集合ハ出来ズ遂〔に〕朝鮮人、支那人ガ集合シテ以来〔以前?〕ヨリ存セシ中韓互助社ヲ盛大ニセシムル様話合ヒマシタ。<sup>(3)</sup>

この動きについては、日本側も情報を得ていたようである。「呂運亨調査」に添付されている日本側の資料は次のように記している。

大正一四年七月中上海ニ於テ支那人發起ノ下ニ被圧迫民族連合会ナルモノヲ組織シ印度、安南、朝鮮、支那ノ四民族集合シタルガ支那側ヨリ国民党主要分子陳興圃、黄致平、<sup>マ</sup>鮮人側ヨリ呂運亨、尹滋英、趙德津、金尚德、金圭冕、趙東祐、金明〔朋〕濬、朴殷植、李範鴻等参席セリ。<sup>(4)</sup>

ここに名前の記される中国人がどのような人物か不明だが、朝鮮人について見ると、呂運亨、尹滋英、趙德津、趙東祐は朝鮮共産党（ただし朝鮮共産党上海支部はまだ成立していない）と関係のある左派的な人物であるのに対して、金朋濬、朴殷植などは大韓民国臨時政府に長く関わつた中道派といふべき人物である。

これらの資料にもとづいて考えると、一九二七年七月、広州における被圧迫民族連合会の成立と足並みを合わせて、上海にいた呂運亨らが中間派の協力をも得て連合会を結成しようとしたが、中国人と朝鮮人以外の参加を得ることができず、広州のようにならぬ。いくつもの民族の代表を結集した被圧迫民族連合会は成立しなかつた、ということになる。

ちなみ、上海には中韓互助社とは別に亜洲協会という団体があった。一九二五年八月初め、西北辺防督弁馮玉祥が自らの代理として上海に派遣した彭程万の歓迎会が亜洲協会主催で開かれている。歓迎会には同協会会長の「頓宮博士」をはじめ「各民族委員」として「夏士博士」、呂運亨、呉山ら二〇名余りが参加したと伝えられる。<sup>(5)</sup>「頓宮博士」「夏士博士」というのがいかなる人物であるか不明だが、中国人・朝鮮人以外の民族ではないかと見られる。亜洲協会は、呂運亨や呉山ら中韓互助社幹部に他の民族の数名が加わった「名士」の団体だったようである。

さらに同じ頃、上海では「亜細亜民族大同盟」なる団体を結成しようとする動きも見られた。一九二七年八月三日、上海の中央公園に同盟の発起人二二〇名余りが会合を持った。これには、インド代表として「十獅子」「満恩」「辛士」、高麗代表として金弘善、柳晨生、鄭煥善、日本代表として徳光衣城、山瀬悟一、佐々木健児<sup>(6)</sup>、そして中国の各界人士が参加したという。黄攻素を臨時主席として始まった会合では、最初に演説した朝鮮人金弘善が「本日の会に来ている日本人は本会の宗旨に合致するものかどうか」と問い、「もし宗旨に合わなければ、その退席を要求すべきである」と述べた。これに対して、日本代表は「日本政府は帝国主義者だが、われわれは反帝国主義者であって、本会の宗旨と合わないことはない」と答えた。主席は、宗旨について討論することを宣言し、中国人李肇甫（もと同盟会会員）などが発言して、「亜洲各民族を連合して世界帝国主義に反抗すること」を宗旨とすることが決められた。団体名称については、主席が、「亜細亜大同盟」は余りに曖昧なので「亜細亜被圧民族大同盟」にすることを提案したのに対し、鄭摩漢なる人物が「亜細亜民族自由大同盟」にすることを主張し、結局暫定的に「亜細亜民族大同盟」とすることになり、大会で再度議論することになった。大会準備委員も決められたが、その後同盟成立大会が開かれたかどうか明かでない。<sup>(7)</sup>

これら上海での動きと広州における被圧民族連合会の成立との間に、どのような具体的関連があるかは明かでないが、五三〇運動の高揚の中でアジア諸民族の共同行動が上海においても模索されたことは注目に値する。

## 三 武漢における東方被圧迫民族連合会

## 1 成立

一九二七年一月二日、武漢で東方被圧迫民族連合会の成立大会が開かれた。大会に参加した団体は、国民党武漢市特別党部、湖北総工会、漢口香煙廠連合弁事処、太古碼頭総工会、武漢碼頭総工会、共產主義青年団、漢口学生連合会、漢口人民通信社、漢口市商業協会、法文学校（フランス語学校）退学会など五〇団体余りだった。中国人以外の参加者はほとんどインド人だったため、中国人の発言の際にはインド人が通訳をした。インド人以外には、若干の朝鮮人とヴェトナム人も参加しており、参加者は合計二〇〇名余りであった。大会では最初に唐愛陸主席が歓迎の辞を述べた後、謝遠定（中共黨員）が結成準備の経過報告を行った。それによれば、二週間ほど前に連合会結成の準備が開始されたという。「インド人が中国国民党に加入して共同して反英闘争をしようとしたが、国民党は中国革命の中でこそ組織されたものであり、またインドの同志は中国籍に入っておらず、国民党の党綱と少し合わない点もある。しかしインドの同志の被圧迫の状況と熱情的傾向は放って置くことができないので、世界革命の団体を組織することになり、三回の準備を経てようやく正式にこの会を成立させたのである」。続いて特別市党部、インド人「某君」、共產主義青年団、湖北総工会、学生連合会、武漢碼頭総工会の代表が相次いで演説を行ない、謝遠定によって読み上げられた簡章と宣言が採択された。簡章にもとづいて執行委員一五名、候補執行委員七名が選ばれた後、最後に謝遠定とインド人の主唱でスローガンを叫んで、大会は終わった。

結成大会で採択された簡章と宣言、スローガンは、以下のとおりである。



## 簡章

- (一) 名称…本会は名称を東方被圧迫民族連合会と定める。
- (二) 宗旨…本会は被圧迫民族を團結させ、帝國主義に反抗する決意を共に図ることを宗旨とする。
- (三) 会員…帝國主義に反抗する決意をもつ者は、国籍・年齢・性別・職業を問わず、本会会員二名の紹介を経て執行委員会の通過により本会会員となることができる。
- (四) 組織
  - (甲) 執行委員会…代表大会で執行委員一五人を選挙し、本会執行委員会を組織し、本会の一切の事務を執行する。毎週一回開き、必要ある時は臨時會議を開くことができる。
  - (乙) 幹事会…執行委員会の下に幹事会を設け、執行委員より五人を互選して下列の五科主任としてこれを組織する。開会の時は総務科主任を主席とする。
  - (丙) 各科主任および幹事…各科で必要な時は、各科主任が責任を持って若干名に依頼して、執行委員会の通過を経て幹事とすることができる。(一) 総務科主任一名、幹事若干名、(二) 宣伝科主任一名、幹事若干名、(三) 組織科主任一名、幹事若干名、(四) 調査科主任一名、幹事若干名、(五) 交際科主任一名、幹事若干名。
  - (丁) 幹事会および各科事務細則…執行委員会によりこれを決定する。
- (五) 主任および幹事の選出…各科主任および幹事は執行委員会でこれを決定する。
- (六) 大会…本会の大会は毎〔月〕一二日に一回召集し、必要ある時は臨時大會を開く。
- (七) 職員任期…本会職員の任期は半年とする。
- (八) 入会費…会員は入会時に入会費大洋二元を納めなければならない。
- (九) 会費…本会会員は毎月会費二角を納めねばならない。

(一〇) 募金…本会は必要な時に寄付金を募集することができる。

(一一) 付則一…本会は必要と認められた時に相当の地点に分会を設置することができる。その分会の簡則は別途論じる。

付則二…本簡章は大会通過後に実行する。もし事宜にかなわない場合は、大会でこれを改正する。

### 宣言〔抜粋〕

〔前略〕いわゆる東方（東亜）はついに完全に英日仏蘭など帝国主義者の植民地あるいは半植民地になってしまった。われわれインド、ビルマ、安南、高麗などの植民地の民衆は、英仏日など帝国主義者がいかに残酷・無人道にわれわれを圧迫しているか、かれらがわれわれの集会・結社・言論・出版などの自由権を剝奪しているか、かれらがわれわれを愚弄してわれわれを分裂させようと図っているか、そして同時にわれわれの種族を滅ぼそうと図っているかを考えるべきである。〔中略〕

圧迫されている東方の民族よ、われわれは長い間このような痛苦を忍んで、死に至っても声を上げないのであるか。われわれは必ず群起・反抗せねばならない。われわれは必ずや一致連合して反抗せねばならない。圧迫されている東方の民族よ、いま世界革命の先進国（ソヴェト・ロシア）はすでに全世界の革命工作の指導を開始している。各帝国主義国内の無産階級はすでに目覚め、頭を上げて帝国主義を打倒する活動を始めている。彼らこそわれわれの友人である。われわれは必ず連合して起ち上がり、彼らと共に全世界の弱小民族の圧迫者（帝国主義）を打倒しなければならぬ。われわれは高く叫ぶ。東方被圧迫民族は連合して起ち上がれ。帝国主義を打倒せよ。被圧迫民族の解放万歳。世界革命の成功万歳。

### スローガン

- (一) 帝国主義を打倒せよ
- (二) 帝国主義の走狗を打倒せよ
- (三) 世界の被圧迫民族と連合せよ
- (四) 世界の無産階級と連合せよ

(五) 蘇俄〔ソヴェト・ロシア〕と連合せよ

(六) 東方被圧迫民族解放万歳、世界革命成功万歳

東方被圧迫民族連合会の簡章や宣言を見る限り、その主旨は広州の被圧迫民族連合会とほぼ同じと考えてよい。武漢と広州の連合会が組織的・人的にどのようなつながりを持っていたか明かでないが、武漢で東方被圧迫民族連合会が結成されるに当たっては、広州の被圧迫民族連合会の簡章や宣言、活動などが参考にされたと見て間違いない。ただ、宣言やスローガンでソヴェト・ロシアとの連合を明確に掲げているのは、国民党左派・共産党のイニシアティブで運営されていた武漢国民政府支配地域で成立した東方被圧迫民族連合会の特徴を示すものといつてよいであろう。

## 2 構成メンバー

武漢の連合会が広州の連合会と大きく異なる点は、インド人が中心になったことである。成立大会の運営などでは中国人がイニシアティブをとっていたが、選出された執行委員のほとんどはインド人によって占められた。執行委員一五名のうち中国人は四名（商業協会劉一華、特別市党部工人部陳英、人力車夫工会平秀山、碼頭総工会張少華）であるのに対して、インド人一名（拉遠生、羈聞生、美爾生、劉瓦生、江南生、博拉生、拉蘭生、沙輪生、拉丹生、達拉拉生）、候補執行委員七名のうち中国人二名（唐愛陸、王滌塵）、インド人五名（哈拉德生、哈爾木生、夏木生、什德生、共姆生）となっており、二二名中インド人が一六名であった<sup>(3)</sup>。実際の運営においてインド人が主体となったかどうかは疑問だが、表面的には東方被圧迫民族連合会はインド人中心の団体だったといえる。

それは、武漢における東方被圧迫民族連合会の結成事情によるものであった。

連合会の結成は、北伐の進行、国民政府の武漢移転という全般的状況と、一九二七年一月三日の漢口惨案（イギリス租界当局

による虐殺事件)、同月五日、六日の武漢・九江イギリス租界の実力回収という武漢におけるイギリスとの対立の深まりとを背景にしたものであった。武漢を国民政府の拠点と考えていた国民党左派・共産党は、広州と同様に、武漢にアジア解放の拠点としてのイメージを与える必要があった。さらに、租界の実力回収は、そこで働いていたインド人の失職問題を生み出し、中国側にとってもインド人を国民革命の側に引きつけることが、イギリスとの対立の中で差し迫った課題になっていたのである。連合会に関わった朝鮮人柳子明は、その回想で次のように述べている。

東方被圧迫民族連合会のインド代表たちは、漢口英国租界地を回収する前には英国租界地で巡捕〔巡查〕をしていた人々だったが、英国租界地を回収するや失業者となっていた。北伐戦争期間、国民政府は東方被圧迫民族連合会の経費として毎月二千元ずつ与えていたので、この金からインド代表たちの生活費を支出した。<sup>(4)</sup>

国民政府が連合会を通じてインド人の生活費を支給したと柳が述べている点については、国民党漢口市党部が連合会の経費として毎月二〇〇元を援助することを国民党中央党部に対して求めていることから、ある程度裏付けられる。<sup>(5)</sup>しかし、連合会結成の目的は、インド人を救済することだけにあつたわけではない。それと並んで、国民革命への協力と参加を促すという点にも重要な目的があつたのである。連合会は六月一二日に開いた執行委員会で、「インドの失職同志は速やかに手だてを講じて中央軍事政治学校に入り軍事訓練を受けること」を決議している。<sup>(6)</sup>もちろんこれ自体失職したインド人を救済するという意味を持っているが、すでに多くの朝鮮人が入校していた中央軍事政治学校武漢分校にインド人を受け入れることによって、彼らが国民革命に参加する方が模索されたことは間違いない。しかし、国共合作崩壊直前のことであつたため、インド人の入校は結局実現しなかつたようである。

東方被圧迫民族連合会は、単にインド人を組織するだけにとどまらなかつた。広州の連合会と同じく、武漢の連合会もアジア人の共同組織としての性格を持っていたのである。結成大会に朝鮮人、ヴェトナム人が参加していたにもかかわらず、彼らが委員に選ばれなかつた理由は不明だが、結成後の連合会には、朝鮮人などが加わって活動している。

二月一二日に開かれた連合会の緊急会議には、中国人六三人、インド人六〇人のほか、朝鮮人五人、ヴェトナム一人が参加している。<sup>(7)</sup>さらに、六月一二日の執行委員会では、組織部の責任者として中国魯乾一、インド「蘭辛」、朝鮮馬天穆、台湾王萬得が選ばれている。<sup>(8)</sup>つまり、知り得る限りでは、武漢の東方被圧迫民族連合会には中国人、インド人、朝鮮人、ヴェトナム人、台湾人が参加していたことになる。

このうち、連合会に関わった朝鮮人については比較的詳しく知ることができる。柳子明は、次のように証言している。

北伐戦争が勝利的に進行していた時、武漢で東方被圧迫民族連合会が成立し、中国、インド、朝鮮の代表がこの連合会に参加した。朝鮮代表としては金奎植と李剣雲と私が参加し、インド代表としてはシャドゥーシン、カンターシン、ピシャーシ  
ンが参加し、中国代表としては王滌塵、畦光録、盧貫一<sup>(9)</sup>が参加した。

金奎植は、パリ講和会議に大韓民国臨時政府代表として派遣され、モスクワで開かれた極東諸民族大会にも参加したことのあ  
る人物である。金は当時上海・南京方面に居住していたが、一九二七年前半には武漢に来ていたことが確認できる。六月一日、  
武漢に組織されていた留鄂韓国革命青年会が六一〇運動の記念集会を開いた時、金奎植は開会の挨拶を述べているのである。こ  
の集会には中国人、インド人も参加し、東方被圧迫民族連合会を代表して「蒲銳渡章」が挨拶をしている。そして司会を務めた  
のが東方被圧迫民族連合会で活動していた馬天穆であったことから考えても、金奎植らが連合会に加わっていたとしても不思議  
ではない。<sup>(10)</sup>一〇年後に作成された日本側の資料も、金奎植の経歴に「昭和二年四月頃中山大学教授に就職中金元鳳と会見し義烈  
団に加盟東方弱<sup>マ</sup>民族連合幹部となる」と記している。<sup>(11)</sup>

柳があげている李剣雲は他の資料では李検雲とも記されており、六月一日の集会で司会を務めた馬とともに国民革命軍に勤  
務し、武漢で結成された留鄂韓国革命青年会の会員であった。<sup>(12)</sup>さらに、連合会の朝鮮人メンバーとして李光済、安載煥の名前を  
あげる資料もある。<sup>(13)</sup>李については不明だが、安については日本側の資料に次のように記されている。

東方被圧迫民族連合会ハ中華民國漢口県漢口市模範区寧波會館二本拋ヲ有シ印度人、支那人、朝鮮人等約百二十五名ヲ以テ

組織セラレ之等民族ガ一致團結シテ彼等ノ所謂共同ノ敵帝國主義ヲ打倒シ以テ資本主義國家ノ支配下ニ在ル印度、安南、朝鮮ヲ各其ノ本国ノ羈絆ヨリ離脱獨立セシメ支那ヲ資本主義國家ノ压迫ヨリ離脱セシムルコトヲ目的トスル結社ナルトコロ被告人〔安載煥〕ハ大正一五年一〇月二〇日頃右連合会幹事金奎植、權俊ノ勧誘ニ依リ同会ガ前叙ノ如ク朝鮮ヲ日本帝國ノ統治羈絆ヨリ離脱獨立セシムル目的ヲ有スル結社ナルコトヲ知りテ之ニ加入シ〔下略〕<sup>(14)</sup>

安が大正一五年（一九二六年）一〇月に連合会に加入したとするのは誤りであるが、他の記述はおおむね正確であろう。安に連合会への加入を勧誘した權俊（正しくは權峻）も、当時武漢で国民革命軍に勤務しつつ韓国革命青年会常務執行委員（庶務部担当）として活動していた人物である。<sup>(15)</sup>

馬天穆、李檢雲、安載煥、權峻などと同じように国民革命軍軍人として、あるいは中央軍事政治学校武漢分校学生として武漢にやってきていた多くの朝鮮人が東方被压迫民族連合会に関わりを持ったと見られる。

### 3 活 動

武漢の東方被压迫民族連合会の活動期間は、一月一二日の成立から七月の国共合作の崩壊までの半年間ときわめて短く、その活動はそれほど活発なものではなかった。広州の連合会が中国人主催の集会などに積極的に参加しているのに比べると、武漢の連合会にはそのような活動はほとんど見られない。

国際的な活動としては、二月に、ブリュッセルで開かれていた被抑圧民族国際大会に祝電を打つことを決めたり、五月三日、武漢で開かれる太平洋労働組合会議に出席する国際労働者代表団の歓迎宴を開いたりしている程度である。<sup>(16)</sup>

武漢の連合会の活動で特徴的なのは、インド人に対する宣伝工作である。印度革命党代表であり東方被压迫民族連合会の常務委員でもあった「辛德萬」が上海で逮捕されたことに対して、連合会は蒋介石に宛てて抗議の電報を打っている。新聞記事によれば、辛德萬は、イギリス帝國主義がインド人軍警を使って中国人を殺しているのを見て、宣伝工作のために上海に赴いていた

が、五月一〇日、上海の中国管轄区域で中国兵およびイギリスの巡捕によって逮捕されたという。この知らせを受けた武漢の連合会は、緊急会議を開いて、国民政府外交部に対してイギリス政府への抗議を要請すること、インド革命団体にこのことを報告してイギリス帝国主義への抗議を行なうようにすること、蒋介石が弱小民族を抑圧していることを宣伝することを決めている<sup>(17)</sup>。さらに、六月下旬、連合会のインド人メンバーによって、中国にいるインド兵と巡捕に向けて、中国人への弾圧に手を貸すのではなく、中国人とともにイギリス帝国主義と闘うことを呼びかける書簡が発表された<sup>(18)</sup>。連合会の実質的な活動は、以上のようなものであった。七月一日から会員登録が呼びかけられているが、実際には行なわれなかったと思われる<sup>(19)</sup>。

国民革命が急を告げる中で、中国人メンバーはもちろんインド人、朝鮮人メンバーも連合会の活動に力を割くことができなかつたのであろう。

七月、中国共産党員が武漢政府から退去することによって、国共合作は最終的に崩壊した。国共合作にもとづく国民革命の進展を背景にして成立した東方被圧民族連合会も終焉をむかえた。

八月末、連合会は国民政府の南京移転を支持する宣言を発表して、武漢での活動を終えた。宣言は、「われわれ被圧民族は連合して起ち上がらなければならない。しかし、韓国、台湾、安南、ビルマなどの国内では公開的に被圧民族と連絡をとって帝国主義打倒の活動をすることができない。ただ中国において「国民党」中央党部および国民政府の援助と保護を受けてのみ、われわれは力を尽くして帝国主義打倒の活動をすることができる」として、蒋介石が支配する国民党中央と国民政府への忠誠を誓っている。「被圧民族は中央党部の指導の下に連合して起ち上がれ!」「中国共産党打倒!」が、宣言の末尾に書かれたスローガンであった<sup>(20)</sup>。この宣言がどのような経緯で作成されたかはわからないが、連合会内の非共産党系メンバーが自らの生き残りを図って発表したものと思われる。

国民政府の統合とともに、連合会も南京へ移転して組織を維持することになった。前に引用した安載煥に対する判決文は次の

ように記している。

右連合会〔東方被圧迫民族連合会〕ハ昭和二年四月其ノ本部ヲ漢口ヨリ江寧県南京城内十廟口ニ移転シタル上機関紙「東方民族」ヲ発刊スルニ至ルヤ被告人ハ右本部内ニ起居シ昭和三年九月ヨリ同年十一月ニ至ル迄右機関雜誌ノ荷造發送等ノ雜役ニ従事シ以テ同会ノ目的遂行ノ為活動シ〔下略〕

連合会が南京に移転した時期を一九二七年（昭和二年）四月とするのは、明らかに誤りである。南京移転後の連合会がここに記されている機関誌刊行などの活動をしたかどうか不明である。機関誌とされる『東方民族』は現在までのところ確認されていない。活動が続けられたとしても、それは広州、武漢における連合会の活動とは大きく異なるものだったであろう。国民革命に共感し、それに参加した中国在住アジア人が国民革命と自らの祖国の解放とを結び付けようとした東方被圧迫民族連合会は、国共合作の終焉とともにその存在を終えたといわざるを得ないのである。

#### おわりに——朝鮮人にとっての東方被圧迫民族連合会

中国国民革命の時期に広州と武漢において成立し活動した東方被圧迫民族連合会は、中国人、朝鮮人、ヴェトナム人、インド人、ビルマ人、シヤム人、台湾人による国際的な共同闘争のための団体であった。その活動は決して充分なものではなかったとはいえないが、アジアの諸民族の間に協同・連帯の意識を深める上で一定の役割を果たしたことは疑いない。植民地・半植民地として支配されるアジア各民族が相互に情報を交換し、帝国主義のアジア支配に反対する協同の意識を高める場を提供しただけでも、その役割は評価すべきであろう。

連合会の活動において中国人の役割が大きかったことは否定できないが、それをもって連合会が中国人の思うままに運営されていたとはいえない。確かに中国人の側に、アジア諸民族を中国国民革命に動員・利用しようという意識はあったであろう。中



国在住アジア人も、中国における国民革命の進展が自らの祖国の解放にとって必要なものであると考え、それに参加した。しかし、その際にも自民族の解放という課題は忘れられたわけではない。連合会に加わって活動した朝鮮人は、広州では留粵韓国革命同志会（あるいは留粵韓国革命青年会）、武漢では留鄂韓国革命青年会を結成して朝鮮人独自の活動を展開していたし、ホー・チ・ミンなどヴェトナム人も越南青年革命同志会を作っていたのである。また、連合会においては中国人と他のアジア人との間に対等な立場が保てるように配慮がなされたことも、すでに述べたとおりである。実際に対等な関係が実現していたかどうかは疑問の余地もあるが、少なくともそれを保証するための努力はなされていたのである。

中国の国民革命の中で東方被圧迫民族連合会はどのような位置を占めていたのであるか。共産党にせよ国民党にせよ、中国側が明確なプランを持って連合会を組織したとは思えない。しかし、「世界の被圧迫民族は団結して帝国主義とたたかおう」という理念は、だれしも否定し得ないものであった。国民革命が実際に進展していくと、中国の革命勢力は中国在住アジア人の問題に直面することになった。抽象的な理念と現実とに直面している問題を結び付ける形で東方被圧迫民族連合会の結成が図られたと見るのが妥当であろう。それはコミンテルンの政策とも合致するものであり、「国際主義」を掲げる分だけ共産党員の取り組みが目立ったが、国民党といえどもそれを拒否することはできなかった。東方被圧迫民族連合会を通じて中国国民革命は、アジア各地の民族解放運動とのつながりを萌芽としてではあれ持つことになった。そしてそれは、中国国民革命がその課題を解決するためにはワシントン体制——中国・東アジアに対する帝国主義の共同支配の体制——を打破しなければならぬということに照応するものであっただけに、大きな意義を持つものだったといえよう。

では、東方被圧迫民族連合会に参加したアジア人にとって、連合会は何を意味したであろうか。朝鮮人の場合を取り上げてそれを考えてみよう。

国民革命の高揚に希望を抱いた多くの朝鮮人が中国各地や朝鮮国内から広州、武漢にやってきたことは、よく知られている<sup>1)</sup>。彼らは黄埔軍官学校、中山大学などで学びながら、朝鮮人独自の活動を展開する一方、直接・間接に東方被圧迫民族連合会の活

動に関わった。そして連合会への参加は、朝鮮人の運動にも影響を及ぼした。それを明らかにするために、この期間の朝鮮人の運動の傾向を示すものとして、一九二四年から二六年までの広州における三一独立運動記念集会を見てみよう。

一九二四年の記念会には、朝鮮人・中国人約二〇名ずつの参加があった。ある朝鮮人が「今後ハ必ずシモ日本人ヲ敵視スルヲ要セズ只各自其ノ良心ニ訴ヘ其ノ人心ダニ死滅スルコト無クンバ即チ早晚光復ノ日ハ来ルベキナリ」と演説したのに対して、中国人謝英伯は「革命事業ニハ必ず一ノ標題アルヲ要シ而モ此ノ標題ハ須ク簡單ナルヲ要ス〔中略〕今後韓国同志諸君ハ当ニ排日ヲ標題トシテ推進セラレベシ」と述べて、朝鮮人よりも強く反日を主張した。<sup>(2)</sup> 記念会に関する情報を得ていた日本当局は、「朝鮮人同志ハ多クハ青年学生ニシテ資金モ欠乏セル為ニ目下ノ処大シタ仕事モ為シ得ザル様子ナリ」として、ほとんど警戒する様子を示していない。

被圧迫民族連合会成立前に開かれた一九二五年の記念会については、詳しいことはわからないが、来賓数十名を含む参加者があり、記念会の後には四台の自動車で市内外を回って宣伝文を配布したという。<sup>(3)</sup> その際に配布された中国語の宣伝文「大韓民国独立宣言第六週紀念辞」は、「相隣同俗の親愛なる中華の兄弟姉妹」に対して、「東亜の平和」を阻害している「強盗日本」とのたたかひを呼びかけるという内容で、文学的表現に満ちた文章で反日を強く訴えるものであった。

被圧迫民族連合会成立後の一九二六年の記念会には、インド人、ヴェトナム人の代表も参加した。朝鮮人数十名は市内で宣言書を撒き独立歌を歌って、朝鮮独立への支持を訴えた。<sup>(4)</sup> 「旅粵韓人会」の名で作成された中国語の宣言書「韓国独立運動第七週紀念辞」は、「親愛なる中華同胞」と「すべての被圧迫民族」に向けての呼びかけとして書かれている。三一運動以後、「革命的思想は日に日に全国に普及し、反抗闘争の精神は日増しに高まり、一般の革命的民衆と全世界の被圧迫民族および被圧迫階級として同一の戦線に奮い赴かせ、共同奮闘して帝国主義を打倒している。東方と西方の被圧迫民族と被圧迫階級の生存と自由を解決せねばならない」。三一運動は、「ただ単に韓国一個の民族のための解放運動でないだけでなく、日本帝国主義と韓国民衆との局部的な闘争にとどまるものでもなく、まさしく東方弱小民族および世界無産階級解放運動の運動と闘争の一部なのである」。

## 韓國獨立運動宣言第七週紀念辭

親愛の中華同胞們！一切被壓迫的民族們

今天！三月一日是七年以前，我韓國民族！尤其是失了一切生存機關，飢寒交迫的工農羣衆們，和沈痛的地獄中，被細的青年學生們，爲民族獨立要解決生活的問題與日本帝國主義，對陣奮鬥而流血的民族獨立宣言紀念日。！我韓國有史以來，初有的三一民族革命運動，都市，城市，以至鄉村，僻處，幾百萬的民族，齊集於民族自決的精神下，要高舉自由民族的旗幟，而奮鬥犧牲的三一革命運動。

這一次的革命運動，！那些懦弱卑怯，不革命的紳士階級，和財富的智識階級，從中搗亂，那正義人道之名詞來，抹殺民氣，緩和民衆的激烈反抗運動，而竟被偉滿遜的好詐巧言，麻醉了我們勇敢的精神，被強盜分贓的國際聯盟會所阻礙，網住了我們偉大的革命動作，而跑到強盜分贓會議前面，要求發慈悲心；講公理正道，使國際帝國主義者，審判是非，而結果唯有犧牲全國愛國民族之血肉於日本帝國主義份外之下，竟出慘痛之失敗。

然而有了三一民衆革命運動以後，我們得了革命上很大的教訓；革命的呼聲與實地的革命行動，逐日的加速事實地化，組織化，民衆化；由三一運動精神，養了無數的勇敢，努力，奮鬥，犧牲的戰士；革命的思想，逐日的普及於全國；反抗鬥爭的精神，日益高漲，以使一般的革命民衆與全世界被壓迫民族及被壓迫階級，奮赴於同一的戰線上，共同奮鬥，打倒帝國主義，要解決東方以及西方的被壓迫民族和被壓迫階級的生存自由。

這「三一運動」是很確實的，很明顯的「民族解放運動之血戰史」的徑路；這是不只爲着韓國一個民族的解放運動，也不是日本帝國主義和韓國民族之局部的鬥爭；簡直是東方弱小民族及世界無產階級解放運動之一部運動和鬥爭。！在這全世界被壓迫民族的解放運動和各階級的革命思想，如日蒸上，越日高漲，同時他一方面，帝國主義者，聯合戰線，將要進攻我們的時候，我們應該特別底，痛憤的，紀念這「流血，悲，壯，光榮之三一運動」而要聯合我們的戰線，鞏固我們的戰鬥能力，以將準備歡迎「明顯的勝利！光明！」我們高喊，

韓國獨立萬歲。

全世界被壓迫民族及被壓迫階級，聯合萬歲。

大韓民國八年三月 日

## 旅粵韓人會

### 1926年の三一運動記念ピラ

宣言文の末尾には、「韓国独立万歳」に並べて「全世界被壓迫民族および被壓迫階級の連合万歳」と記されている。前年の「紀念辭」と比べてみる時、帝國主義によって圧迫されている民族（および無産階級）との連帯の意識が強調されていることが特徴的である。<sup>(5)</sup>

以上のように、被壓迫民族連合会が成立し活動を開始した時期を以て、廣州における朝鮮人の運動は明確な変化を示した。一言でいうと、「反日」から「反帝」への転換である。他のアジア民族の状況を知ることを通じて、そのような意識の変化がもたらされたと考えてよい。

日本当局は、東方被壓迫民族連合会に参加した朝鮮人に警戒の目を向けていた。連合会への参加は朝鮮に対する日本の統治を覆そうとする犯罪であるというのが、日本当局の見方であった。東方被壓迫民族連合会が活動を停止した一九二七年九月には早くも、連合会参加を治安維持法違反とする判決が出ていることが知られる。朝鮮総督府新義州地方法院が「東方弱小民族連合会員」金章玉に対して懲役一年の判決を下しているのである。<sup>(6)</sup> すでに見たように、武漢の連合会に加わって活動した安載煥は、一〇年後に逮捕

されたが、連合会での活動を治安維持法違反とされ、他の活動と併せて懲役四年の判決を受けた。

日本当局が見抜いていたように、東方被圧迫民族連合会における朝鮮人の活動は、他のアジア民族との連帯意識を深めつつ、自らの民族の解放を勝ち取るための活動だったのである。

振り返ってみるなら、東方被圧迫民族連合会以前にもアジア人の共同組織の試みは何度か見られた。明治末年日本の地で結成された亜洲和親会、一九二〇年代初めに中国各地に作られた中韓互助社の運動などをあげることができる。しかし、亜洲和親会の場合は、朝鮮に対する日本の侵略に明確な態度を示さなかった日本人への不信から朝鮮人が参加しなかった。中韓互助社の場合は、参加者が中国人と朝鮮人に限られていた上、「反日」という点だけで一致して作られた連帯組織という限界があった。それらに比べると、東方被圧迫民族連合会は、多くの民族が帝国主義のアジア支配と共同してたたかうための組織であったという点で、画期的ともいえる意義を持つものであったのである。そこに中国国民革命の国際的な意義を見出すことは、過大な評価ではないであろう。

## 注

### はじめに

- (1) ニム・ウェールズ、キム・サン著（松平いを子訳）『アリランの歌』岩波文庫、一九八七年、一六七—一六八頁。「東方被圧迫民族連合会」は英語原文では League of Oriental Nations とされている。Kim San and Nym Wales, *Song of Arirang—A Life Story of a Korean Rebel* New York, The John Day Company, 1941, p. 86. 広州の連合会は、正式には「被圧迫民族連合会」であり、「東方」は付いていないので、「東方被圧迫民族連合会」とするのは正確ではない。同書の翻訳に際して人名・組織名などを比定する作業は筆者が行ったもので、正確さに欠けていた。また同書の訳注では武漢の東方被圧迫民族連合会についてしか触れることができなかった。本稿は、その不十分な点を
- (2) ヴェトナムで刊行されたものとして、Truong-Chinh, *President Ho-Chi-Minh: Beloved Leader of the Vietnamese People*. Hanoi: Foreign Languages Publishing House, 1966, p. 15.
- (3) Thomas Hodgkin, *Vietnam: The Revolutionary Path*. London: Macmillan Press Ltd, 1981. William J. Duiker, *The Rise of Nationalism in Vietnam, 1900-1941*. Ithaca and London: Cornell University Press, 1976. 古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニシティ——』大月書店、一九九一年。

補完する意味もある。ただし、本稿でも広州と武漢の連合会を総称する場合、「東方被圧迫民族連合会」と呼ぶことにする。

なお、キム・サンが被圧迫民族連合会の結成を一九二六年のこととしているのは、誤りである。

- (4) ホッジキンは、連合会を「朝鮮人、インドネシア人、マレーシア人、インド人、中国人そしてヴェトナム人の広範な戦線」であったとしてる (Hodgkin, *op. cit.*, p. 225)。これに対して、デュイカーは、「国民党員廖仲愷とインドの共産党員 M・N・ロイの援助を得て、彼「ホー・チ・ミン」は短期間存在したアジア被圧民族連合会を南京で結成した。それは朝鮮人、インドネシア人、インド人、中国人そしてヴェトナム人で構成されていた」としている (Dunker, *op. cit.*, p. 202)。最近刊行された古田元夫の研究では、「グエン・アイ・クオック〔ホー・チ・ミン〕が、青年革命同志会をはじめとする広州で接点をもつアジア各地の革命運動の連合組織として結成したアジア被圧民族連合会には、中国、朝鮮、ベトナム、インドネシアの革命家が参加したと言われている」とした上で、「中山大学で開催されたこの会の結成会議には、インド人や日本人も参加していたという説もある」と注を付けている (古田、前掲書、一一七—一八頁、一四七頁)。
- (5) 黄録、前掲書、三〇—三二頁。
- (6) 雑誌『奮進』第一期(広州)に、巖「東方被圧民族連合会与帝国主義」という論文が掲載されていることが確認される(『広州民国日報』一九二七年二月二六日、広告)が、入手できなかった。この雑誌が実際に発行されたかどうかとも未確認である。

### 第一章

- (1) 「印度人加入反帝国主義運動」『広州民国日報』一九二五年六月二七日。
- (2) 「印人紛紛来省」『広州民国日報』一九二五年六月二九日。なお、「英帝国主義者圧迫印人」『広州民国日報』一九二六年一〇月九日、も参照。
- (3) 「各弱小民族定期会議」『広州民国日報』一九二五年六月三〇日。
- (4) 「弱小民族代表対沙基惨案之宣言」『広州民国日報』一九二五年七月三日。「工人之路」一九二五年七月二日付では、「旅粵高麗安南印度代

東方被圧民族連合会(一九二五—一九二七)について

表通電」となっている。

- (5) 「被圧民族連合会公議誌」『広州民国日報』一九二五年七月一日。この七月九日の大会が連合会の最初の会合であったわけではないようである。陳春圃は挨拶で「前回の会では諸君の中でまだ参加していなかったものがあるが、今日の会は前回よりいっそう人が多くなった」と述べており、前掲「東方被圧民族大連合之第二聲」(『広州民国日報』一九二五年七月三日)でも、「昨日、安南、印度、朝鮮および中国の民衆が東方被圧民族連合大会を中央党部で開いて革命委員会を組織した」としている。これらは、おそらく六月三〇日の「人民大会」を指すものと思われる(後者の「昨日」は新聞の日付の前日を示すものではない)。しかし、会規が正式に定められたのは、七月九日の大会においてである。連合会自身も宣言で「我々の被圧民族連合会は一九二五年七月九日に広州で丁重に成立を宣言した」としている(「被圧民族連合会宣言」『広州民国日報』一九二五年七月二〇日)。
- 以上のことから、連合会の正式成立日を七月九日とみなすことにする。
- (6) 「被圧民族連合会公議誌」『広州民国日報』一九二五年七月一日。「被圧民族連合会会規」『工人之路』一九二五年七月二日。
- (7) 「被圧民族連合会簡章」『広州民国日報』一九二五年九月一七日。
- (8) この時期、中国国民党員らがアジアの諸民族の間に平等な関係を築こうという意識をもっていたことは、一九二六年一月の国民党第二次全国代表大会で決議された「大会宣言」からも読み取ることができる。「大会宣言」は、「世界の一切の被圧民族の革命運動は、連合戦線の必要がある」とした上で、次のように述べている。「一切の被圧民族相互の間では、平等をもつて我に對することを他に要求すると同時に、我にも平等をもつて他に對することを要求する。このようにしてはじめて、世界において平等をもつて我に對する民族と連合して共同奮闘することができるのである」(中国第二歴史檔案館編『中国国民党第一、二次全国代表大会公議史料』(上)、江蘇古籍出版社、一九八六年、四四一—四四二頁)。

- (9) 「被压迫民族連合会宣言」『広州民国日報』一九二五年七月二〇日。  
 「被压迫民族宣言」『工人之路』一九二五年七月二〇日。
- (10) 後述のように上海で被压迫民族連合会を結成しようとした朝鮮人呂運亨は、国民党第一次全国代表大会で演説したが、その中で、コミンテルンが一九二二年にモスクワ、ペトログラードで開催した極東諸民族大会（正確には極東共産主義的革命的諸組織第一回大会）のことを「東方被压迫民族連合会」と呼んでいる（前掲『中国国民党第一、二次全国代表大会會議史料』（上）、三〇二頁）。中国で結成された連合会はコミンテルンの方針に沿うもの、極東諸民族大会を受け継ぐものとして意識されていたと考えられる。
- (11) 「被压迫民族連合会致第三國際電」『広州民国日報』一九二五年七月二二日。「被压迫民族連合会致第三國際電」『工人之路』一九二五年七月二二日。
- (12) 英語版では G. Lai-Shou, 'The International Union of the Oppressed Peoples of the East. *International Press Correspondence*, Vol. 5 No. 89, 24 Dec. 1925. 中文語版では G. Lai-Shou, Die Internationale Vereinigung der unterdrückten Völkerim Osten. *Internationale Presse-Korrespondenz*, 5 Jahrgang Nr. 164, 15 Dezember 1925. ちなみに、『インプレコール』のこの通信記事は、イギリス外務省文書にも入っている。一九二六年一月七日スコットランド・ヤードが外務省中国課あてに送った英文『インプレコール』の記事には、「これ〔被压迫民族連合会〕は、新しい組織のようで、注意すべきものかもしれない」との添え書きが付けられている。Great Britain, Public Record Office. Foreign Office; F. O. 371, China. General Correspondence, Political. Year 1926, Micro film Reel 22 (文書番号六〇〇)。  
 イギリスの外務省文書には、これ以外にも、広州から送られた多くの情報文書が入っているが、連合会に触れたものは見あたらない。イギリスの出先機関にとっては、連合会は警戒に値しないものと映っていたのかもしれない。
- (13) 連合会の幹部ホー・チ・ミンはボロディンのもとで翻訳の仕事に携わり、「鮑公館」（ボロディン公館）に居住していた（黄錚、前掲書、一八一—二〇頁）ので、ボロディンに連合会の結成や活動について報告していたと考えるのが自然である。前述の『インプレコール』に掲載された記事の筆者「Lai-Shou」はホー・チ・ミンの仮名李瑞ではないかと思われる。
- (14) 「被压迫民族連合会代表姜世宇先生在廿五次罷工工人代表大会演講辭」『工人之路』一九二五年九月一九日。
- (15) 「被压迫民族之連合會議」『工人之路』一九二五年十一月一六日。
- (16) 「被压迫民族連合会改組」『広州民国日報』一九二六年二月二三日。
- (17) 朴泰遠『若山と義烈団』（朝鮮文）ソウル、白楊堂、一九四七年、二〇六頁。姜世宇の経歴は不明だが、一九二八年六月の時点で日本当局が把握していたところでは、咸鏡南道（原文では咸鏡北道）甲山郡出身、三〇歳、義烈団員、モスクワ在住とされる。『朝鮮日報』一九二九年十一月三日。この新聞記事については韓国国史編纂委員会の韓相禱氏の教示を得た。
- (18) 孫斗煥については、前掲拙稿、五〇頁、七八頁、参照。
- (19) 慶尚北道警察部『高等警察要史』復刻版、ソウル、高麗大学校民族文化研究所、一九六七年（原本一九二九年？）、一〇七頁。
- (20) 黄錚、前掲書、三二頁。
- (21) 「被压迫民族連合会之會議」『広州民国日報』一九二五年九月一六日。
- (22) 「被压迫民族連合会會議」『広州民国日報』一九二六年八月一〇日。
- (23) 「被压迫民族連合会改組」『広州民国日報』一九二六年二月二三日。
- (24) 「被压迫民族連合会改組」『工人之路』一九二六年二月三日。
- (25) 「被压迫民族連合会改組」『工人之路』一九二六年一月三日。
- (26) 「被压迫民族連合会會議」『広州民国日報』一九二六年三月一七日。
- (27) 「被压迫民族連合会啓事」『広州民国日報』一九二六年八月二日。
- (28) 「被压迫民族連合会第三次會議記」『工人之路』一九二五年八月二三

日。

(28) インド、ビルマから帰国した中国人が組織していた団体。幹部には許魁魂、鮑惠僧(包惠僧)、馬瑞など、連合会の幹部を兼ねる者が多かった。「印緬同志倶楽部成立消息」『広州民国日報』一九二六年三月四日。

(29) 「被压迫民族連合会啓事」『広州民国日報』一九二六年八月二日。

(30) 「被压迫民族連合会之會議」『広州民国日報』一九二六年五月一日。

(31) 「被压迫民族連合会之通電」『広州民国日報』一九二七年八月三日。

「被压迫民族連合会為法領事在华境内逮捕潘巢南君之通電」『工人之路』一九二七年七月二日。

(32) 「被压迫民族連合会敬告越南国民書」『広州民国日報』一九二七年八月四日、「工人之路」一九二七年八月二日。

(33) 「印人被帝国主義压迫之呈訴」『広州民国日報』一九二六年三月九日。

「被压迫民族連合会向德領交涉」『広州民国日報』一九二六年三月一日。

(34) 「被压迫民族連合会會議」『広州民国日報』一九二六年三月一日。

(35) 「德領事致被压迫民族連合会函」『広州民国日報』一九二六年三月一日。

(36) 「被压迫民族連合会之會議」『広州民国日報』一九二六年五月一日。

(37) 「被压迫民族連合会第三次會議記」『工人之路』一九二五年八月二三日、「被压迫民族宣言」『工人之路』一九二五年八月二七日。

(38) 「被压迫民族連合会代表姜世宇先生在廿五次罷工工人代表大会演講辭」『工人之路』一九二五年九月一日。

(39) 「被压迫民族会第六次會議」『広州民国日報』一九二五年一〇月一三日。

(40) 「被压迫民族連合会对東征宣言」『広州民国日報』一九二五年一〇月二二日、および「工人之路」一九二五年一〇月二二日。

(41) 「被压迫民族歡迎華僑大会」『工人之路』一九二五年一月二四日。

(42) 前掲「中国国民党第一、二次全国代表大会會議史料」(上)、一九二五年被压迫民族連合会(一九二五—一九二七)について

頁。

(43) 前掲「中国国民党第一、二次全国代表大会會議史料」(上)、二九八頁。

(44) 王達人がホー・チ・ミンであることについては、黄錚、前掲書、三五—三七頁。呂光克を呂運亨とする根拠、および二人の演説内容については、拙稿「呂運亨と中国国民革命——中国国民党二全大会における演説をめぐって——」『朝鮮民族運動史研究』第八号、一九九二年四月発行予定、参照。

(45) 「広東済難總會昨日成立」『広州民国日報』一九二六年三月六日。

(46) 「被压迫民族連合会為巴黎公社紀念日告中華民族」『広州民国日報』一九二六年三月一日。「各界紀念巴黎公社大会詳情」『広州民国日報』一九二六年三月一日。

(47) 「被压迫民族連合会為英法荷帝國主義者蹂躪華僑告全世界被压迫民族」『工人之路』一九二六年四月二日。「被压迫民族連合会宣佈帝國主義罪狀」『広州民国日報』一九二六年四月二日。

(48) 「国民政府下之「五一」労働節」『広州民国日報』一九二六年五月三日。

(49) 「各界籌備紀念「五卅」週年會議」『広州民国日報』一九二六年五月二七日。「各界舉行「五卅」慘案紀念示威巡行廣告」『広州民国日報』一九二六年五月二七日。

(50) 「被压迫民族連合会对于解決省港罷工宣言」『工人之路』一九二六年七月一日。「預聞」『広州民国日報』一九二六年八月二〇日。「海外同志与被压迫民族紀念總理誕日宣言」『広州民国日報』一九二六年一月一日。

(51) 「各界歡迎國際工人代表團大会之熱烈」『広州民国日報』一九二七年二月二五日。

(52) 吳の経歴については、拙稿「吳成崙」『朝鮮民族運動史研究』第七号、一九九一年四月、参照。

(53) 「國際工人代表團贈送革命紀念旗」『広州民国日報』一九二七年二月

- 二五日。
- (54) 「国際反帝武力干渉中国運動大会開会之熱烈情形」『広州民国日報』一九二七年二月二六日。
- (55) 前掲『アリランの歌』一六八頁。
- (56) 「各界祝捷反帝援難大会籌備會議」『広州民国日報』一九二七年四月二一日。
- (57) 「被压迫民族連合会援助英国罷工」『広州民国日報』一九二六年五月二一日。
- (58) 「被压迫民族連合会為英国大罷工事告省港罷工工友書」『工人之路』一九二六年五月二一日。「被压迫民族連合会為英国大罷工事告英屬植民地民衆書」『工人之路』一九二六年五月二五日。
- (59) 「各界援助英国大罷工籌備會議」『広州民国日報』一九二六年五月二五日。
- (60) 「援助英国大罷工猛烈進行」『工人之路』一九二六年六月四日。
- (61) 「各界援助英国罷工大巡行」『広州民国日報』一九二六年六月九日。
- (62) 「被压迫民族連合会之會議」『広州民国日報』一九二六年五月二一日。
- (63) 「中華全国総工会通電」『工人之路』一九二六年七月二一日。「罷工委員会電援韓国革命」『工人之路』一九二六年七月二三日。「北京総工会援助朝鮮民族獨立運動」『広州民国日報』一九二六年八月一〇日。
- (64) 「濟難会第二期職員會議」『広州民国日報』一九二六年一〇月八日。
- (65) 中国濟難会『韓国光復運動紀実』一九二六年、はモスクワのレーニン図書館所蔵。日本当局もこの小冊子に注目して、全訳している。大正一五年一〇月三日付在上海矢田総領事發信幣原外務大臣宛報告要旨「中国濟難会ノ所謂被压迫民族解放運動ニ対スル声援」『外務省警察史』二五七五八—二六七九八頁、日本外務省文書SP・二〇五一—六、リールSP・一三〇。この外務省への報告には「中国濟難会台湾改命「革命」運動被難者ヲ援助スルノ通告」というピラの翻訳も含まれている。
- (66) 「各界進行反抗帝國主義武力政策」『工人之路』一九二六年一〇月二九日。
- (67) 「各界援助万県朝鮮民衆會議」『広州民国日報』一九二六年一〇月二〇日。
- (68) 「工人代表大会之重要通告」『広州民国日報』一九二六年一〇月二五日。「公安局政治部為反英援韓告全国同胞」『広州民国日報』一九二六年一〇月二六日。
- (69) 「廣東各界反抗英帝國主義屠殺万県同胞及援助韓國獨立運動大會宣伝大綱」『広州民国日報』一九二六年一〇月二八日。
- (70) 「各界反对英国砲擊万県示威大巡行」『広州民国日報』一九二六年一月二八日。「各界反对英国砲擊万県示威」『工人之路』一九二六年一月二八日。
- (71) 黄錚、前掲書、三八頁。
- (72) 「総政治部召集各界団体籌備反日出兵運動情形」『広州民国日報』一九二七年六月一四日。

## 第二章

- (1) 中韓互助社については、小野信爾「三一運動と五四運動」飯沼二郎・姜在彦編『植民地期朝鮮の社会と抵抗』未來社、一九八二年、参照。上海の互助社については、「呂運亨調書」金俊燁・金昌順共編『韓国共産主義運動史・資料篇(II)』ソウル、高麗大学校亜細亞問題研究所、一九七九年、二六一頁。この調書は呂運亨が逮捕された後、一九二九年に行われた朝鮮の警察での取り調べの際に作成されたものである。
- (2) 前掲「呂運亨調書」二六〇頁。
- (3) 前掲「呂運亨調書」一三六頁。
- (4) 前掲「呂運亨調書」二四〇頁。
- (5) 「亞洲協會歡迎馮玉祥代表紀盛」『民国日報』(上海)一九二五年八月四日。
- (6) 佐々木健児(一九〇四—一九七八)は神戸生まれ。東亜同文書院中



退後、一九二四年から東方通信社（のち新聞連合社）北京支社に勤務し、南京支局長・同盟通信社北支総局長・同盟通信社中華総社長等を歴任した。佐々木健児追悼録刊行会編集・発行『佐々木健児』一九八二年、一四三―一四五頁。この追悼録については水谷尚子氏の教示を得た。他の日本人については不明である。

- (7) 「亜細亜民族大連合先声」『民国日報』（上海）一九二五年八月六日。

### 第三章

- (1) 三〇〇名余りとするものもある。「東方弱小民族連合会在漢口開成  
立大会」『広州民国日報』一九二六年一月二七日。
- (2) 成立大会の経過および以下の簡章・宣言・スローガンは、「東方弱  
小民族連合会昨日在漢開成立大会詳記」『漢口民国日報』一九二七年  
一月一三日、による。
- (3) 「東方弱小民族連合会昨日在漢開成立大会詳記」『漢口民国日報』一  
九二七年一月一三日。
- (4) 柳子明、前掲書、一〇一―一〇二頁。
- (5) 「漢市党部呈請中央補助東方被圧迫民族連合会経費」『漢口民国日  
報』一九二七年三月二七日。
- (6) 「東方被圧迫民族連合会整理会務」『漢口民国日報』一九二七年六月  
一五日。
- (7) 「東方被圧迫民族連合会」『漢口民国日報』一九二七年二月一四日。
- (8) 「東方被圧迫民族連合会整理会務」『漢口民国日報』一九二七年六月  
一五日。
- (9) 柳子明、前掲書、一〇一頁。
- (10) 「留鄂韓同志紀念「六十」之热烈」『漢口民国日報』一九二七年六  
月一一日。なお、愛国同志援護会編『韓国独立運動史』三六二頁は、  
金が連合会の会長に選ばれたとするが、間違いであろう。金奎植の伝  
記としては、李庭植「金奎植の生涯」ソウル、新丘文化社、一九七四  
年、がすぐれているが、東方被圧迫民族連合会への関与については、

東方被圧迫民族連合会（一九二五―一九二七）について

『韓国独立運動史』の記述をそのまま引いているだけである。

- (11) 朝鮮総督府警務局保安課『高等警察報』第六号、一九三七年、三二  
二頁。ただし、中山大学教授になったこと、義烈団に加入したことは  
確認できない。
- (12) 前掲拙稿「黄埔軍官学校と朝鮮の民族解放運動」五七頁。
- (13) 愛国同志援護会編、前掲書、三六二頁。
- (14) 朝鮮総督府高等法院検事局思想部「思想彙報」第一九号、一九三九  
年六月、二八〇頁。昭和十三年四月六日平壤地方法院判決。なお、安  
は別名安東晚。一八九八年平安南道安州生まれ、二一歳で満州に渡り、  
一九二〇年五月頃上海に行き臨時政府朴殷植らの影響を受ける。二六  
年一月広東軍官学校武昌分校（黄埔軍官学校武漢分校）に入学、義烈  
団に加入。二七年三月留鄂韓国革命青年会結成に参加、常務執行委員  
（財務部担当）。三二年韓国革命党、三六年民族革命党に加入して活  
動。三七年二月日本上海総領事館警察に逮捕され、朝鮮に送られる。  
安の経歴は、前掲の判決文、朝鮮総督府警務局「国外三於ケル容疑朝  
鮮人名簿」一九三四年、復刻版、ソウル、民族文化社、刊行年不明、  
四頁、および前掲拙稿「黄埔軍官学校と朝鮮の民族解放運動」五七―  
五八頁、などによる。
- (15) 前掲拙稿「黄埔軍官学校と朝鮮の民族解放運動」参照。
- (16) 「東方被圧迫民族連合会」『漢口民国日報』一九二七年二月一四日。  
「簡訊」『漢口民国日報』一九二七年五月四日。
- (17) 「印度代表在滬逮捕」『漢口民国日報』一九二七年五月一六日。
- (18) 「駐華印兵及巡捕急速自覚」『漢口民国日報』一九二七年六月二日。
- (19) 「東方被圧迫民族連合会緊急通告」『漢口民国日報』一九二七年六月  
一八日。
- (20) 「東方被圧迫民族連合会宣言」『漢口民国日報』一九二七年九月一日。  
『思想彙報』第一九号、一九三九年六月、二八〇頁。愛国同志援護  
会編、前掲書、三六二頁、にも次のような記述がある。「東方被圧迫  
民族連合会は」機関紙として『東方民族』月刊を中・英・韓三国文で

発刊して関係各国に発送し、また秘密に各国に人員を派遣して秘密支部を設置し、同志を糾合して運動範囲を拡張するなど、諸般の工作を推進した。」

おわりに

- (1) 前掲「アリランの歌」一五七頁以下、および前掲、拙稿、参照。
- (2) 大正一三年三月三日付在広東天羽総領事発信松井外務大臣宛報告要旨「韓国独立第五週記念ニ関スル件」前掲「外務省警察史」三四六五—三四六五六頁、リールSP・一三九。「留粵韓人之独立五週記念会」『民国日報』（上海）一九二四年三月一三日、では参加者は朝鮮人二〇名余、中国人三〇名余とされ、演説した朝鮮人は黄埔軍官学校教官の楊寧（楊林、本名金勳）らであったとされるが、本文に引用した演説が誰によるものか不明である。
- (3) 「広東の三一節」『独立新聞』第一八三号、一九二五年三月二三日。
- (4) 「韓人挙行七週独立記念」『広州民国日報』一九二六年三月四日。
- (5) 一九二五年と一九二六年の「記念辞」は、韓国の独立記念館が複製したものを利用した。一九二六年の宣言書は『広州民国日報』一九二六年三月四日にも全文掲載されている。
- (6) 「東方弱小民族会員ノ懲役一年言い渡しノ治安維持法違反で処刑」『朝鮮日報』一九二七年九月一九日。